

川崎大師教學研究所紀要・第10号抜刷
令和七年三月二十一日発行
川崎大師教學研究所

聖憲撰『釈論百条第三重』翻刻・国訳
——《約頭約密》——

鈴木晋雄（雄太）

聖憲撰『釈論百条第三重』翻刻・国訳

—《約頭約密》—

鈴木 晋雄（雄太）

一、はじめに

頼瑜（一二二六～一三〇四）の教学を継承し、新義教学の大成者と評される聖憲（一二三〇七～一三九二）の最も大きな功績は、『大疏百条第三重』と『釈論百条第三重』の撰述にあるとされ、その理由は頼瑜以来の根来寺における膨大な論義を整理し、わかりやすくまとめあげたことにある。『第三重』の両著作は、現在行われる智山派の論義法会においても底本として重用されており、当時から現代に至るまで新義学派の教学研鑽の中核を担ってきた。このうち、『大疏百条第三重』は活字化¹がなされる一方、『釈論百条第三重』は未だ翻刻・国訳を含めた活字化²がなされていない。そこで筆者は、これまで『釈論百条第三重』巻一より、順次翻刻・国訳を行ってきた³。本稿はそれに続き、『約頭約密』を取り上げ、翻刻・

国訳を行い、併せて引用文の出典等を明記していく。

二、論題概要

《約顯約密》

『釈摩訶衍論』に説かれる三十三法門について、宗家（空海）の意に随って顯密を判ずる時、不二法門を密教とし、三十二法門は顯教に局るとするか否かを論ずるものである。これについて、華遊院会慶（二二三頃）と蓮華院俊晴（一一八五頃）の両門跡の義をはじめ様々な異義があるものの、答者は三十二法門は唯だ顯教のみに局るとの立場を取る。

頼瑜『釈論第一愚草』には《約顯約密》に相当する論題は見当たらない⁴。但し、三十三法門について顯密を判ずる時、不二法門は密教に局るか否かを論ずる《六、不二唯為密藏歟事》⁵はある。なお、古義派の論義書である『釈論決択集』には、《約顯約密》と同じ内容を扱う《真如顯密分別》があり、そこでは真如門は密教に当たると捉えており、新義派の《約顯約密》と相對する見解を取る。

【付記】 本稿における翻刻・国訳に際し、便宜をいただいた各位、殊に川崎大師教学研究所には心より感謝申し上げます。

三、【翻刻・国訳】『釈論百条第三重』巻一

【凡例】

一、本翻刻・国訳は川崎大師教学研究所に所蔵されている版本『釈論百条第三重』（書架番号…10025）巻一を底本とした『約顕約密』の翻刻・国訳である。なお、必要に応じて、天和二年版『釈論百条第三重』（川崎大師教学研究研究所蔵本・書架番号…23561）、運敞撰『大疏啓蒙第一』（川崎大師教学研究研究所蔵本・書架番号…10024）も参照した。

二、本資料（『釈論百条第三重』巻一）の書誌情報は、鈴木晋雄「聖憲撰『釈論百条第三重』翻刻・国訳―『大乘通局』『顕論密論』『不二顕密』―」（『川崎大師教学研究所紀要』五、二〇二〇）参照。

三、翻刻に当たっては以下の形式に基づいた。

①漢字の表記は原則として底本に従ったが、一般的でない異体字・略字等は通用の字体に改めた。

②振り仮名、送り仮名、返り点の表記も底本に従った。但し、「シテ」「ナリ」「コト」等の片仮名の略字は開いて表記した。

③割注は該当箇所をへゝにて括った。

④引用文に省略等がある場合は、必要に応じて（ ）にて補った。

⑤底本の明らかな誤植等は適宜改めて注記した。

四、国訳に当たっては以下の形式に基づいた。

①本文中に使用されている旧字等は通用の字体に改めた。

②書名には『』、引用文には「」を付し、可能な限り出典を示した。書名・出典の略号は以下の通り。

『釈論』 龍樹『釈摩訶衍論』

『疏』 法敏『釈摩訶衍論疏』

『通玄鈔』 志福『釈摩訶衍論通玄鈔』

『贊玄疏』 法悟『釈摩訶衍論贊玄疏』

『記』 普観『釈摩訶衍論記』

『起信論』 馬鳴『大乘起信論』

『二教論』 空海『弁顕密二教論』

『声字義』 空海『声字実相義』

『十住心論』 空海『秘密漫荼羅十住心論』

『大正蔵』 『大正新脩大蔵経』

『正統』 『正統蔵経』（z本）

『弘大全』 『弘法大師全集』

『興大全』

『興教大師全集』

※本資料において、「今論」は『釈摩訶衍論』を指し、「本論」は『大乘起信論』を指すため、各々『（今論）』『（本論）』で括った。

③割注は該当箇所をへゝにて括った。

④底本には段落・改行が殆どないため、内容を考慮し、適宜段落を分けて改行を試みた。

⑤底本において、引用文には返り点が付されていないが適宜書き下した。

⑥翻刻に際し、送り仮名は版本の通りに付すことを心掛けたが、国訳するに当たって不足の送り仮名を補った。

⑦引用文に省略等がある場合は、必要に応じて（ ）にて補った。

⑧底本の明らかな誤植、また運敵により誤りと指摘される箇所は、修正したうえで国訳した。

註

1 『大正蔵』（第七九卷、二五三八番・二五三九番）に掲載があり、さらには勝又俊教氏の『真言の教学』によって算題すべての国訳と引用文一々の出典が精査されている。

2 但し、『法義勝劣』『二門峙立』『立義法教』『自門心念』『無為第八』は、新義真言研究会『大疏第三重・釈論第三重の研究』（二〇〇一、大正大学総合仏教研究所）の中で翻刻・国訳がなされている。

3 鈴木晋雄「聖憲撰『釈論百条第三重』翻刻・国訳——『大乘通局』『顯論密論』『不二顯密』——」（『川崎大師教学研究紀要』

五、二〇二〇、「聖憲撰『釈論百条第三重』翻刻・国訳——《不二機根》《三分機根》——」（『川崎大師教学研究所紀要』六、二〇二一）、「聖憲撰『釈論百条第三重』翻刻・国訳——《前門後法》——」（『川崎大師教学研究所紀要』七、二〇二二）、「聖憲撰『釈論百条第三重』翻刻・国訳——《得不問答》——」（『川崎大師教学研究所紀要』八、二〇二三）、「聖憲撰『釈論百条第三重』翻刻・国訳——《五心中品》《三天法体》——」（『川崎大師教学研究所紀要』九、二〇二四）

4 『密教大辞典』における「約顯約密」の項には、典拠として『釈論愚草一下』の名が挙げられるが、管見の限り、当該箇所は見当たらない。

5 『釈論百条第三重』《不二顯密》に相当する。

【翻刻】《約顯約密》

宗家ノ意以三十三ノ法門^ヲ判^{スル}顯密^ヲ之時以不二^ヲ為^レ密^ト三十二ノ法門ハ唯可^レ云^レ局^レ顯^ニ乎 答當寺兩門跡ノ異義也

若花遊院ノ義意^{ナラハ}於三十二ノ中ニ真如十六ノ門法^{ニハ}可^レ有^ニ顯密ノ二義^一是^ヲ云^ニ約顯約密ノ義^ト也若依蓮花院ノ義^ニ者三十

二^ハ一向可^レ云^レ局^レ顯^ニ也兩義俱^ニ不^レ明先付^テ花遊院ノ義^ニ云^ニ三真如ハ通^ニ顯密^ニ者凡思^ハ顯密之差異^ヲ以^ニ緣起性德^ヲ為^ニ其

別^ト而^ニ不^ニ一^ハ是性德圓滿海ノ根源三十二^ハ又修行種因

海ノ枝末也三十二ノ法門若^ハ真如若^ハ生滅無^下從^ニ不^ニ二^ト不^ス中^ト云

緣起^セ若^ル者真如一向顯^{ニシテ}不^レ可^レ有^ニ通^レ密^ニ之義^一依^レ之宗

家引^ニ第一第五第十ノ三處ノ文^ヲ為^ニ顯密ノ誠証^一之時證^{スル}コト密^ヲ

唯局^テ不^ニ二^ニ不^レ通^ニ餘ノ法門^ニ乎次^ニ付^テ蓮花院ノ義^ニ又不^レ明宗

家ニ教論ノ中ニ引^ニ真如門ノ廣說段ノ言語心量離不離之

文^ヲ畢^テ言語心量離不離之義此論明說顯教智者詳

而解迷^文釈^意非^レ顯^ニ言語心量ノ不離^{ナルハ}密離^{ナルハ}顯^ト乎彼言

語心量^ト者真如門ノ言^{心也}若^ル者於^ニ真如ノ法門ノ上^ニ

見^ニ四言九心離絶^ト之邊顯也^ニ以^ニ如義一々心^ヲ見^ニ緣^ニ詮^{スト}

真如^ノ理^ヲ之邊^ハ密也^可知真如門^ハ通^ト顯密^ニ云事是以金

剛頂經ノ開題^ニ上^ニ拳^ニ法^ニ法^ニ三密曼荼^ノ四身^ヲ畢非^ニ九種心

量ノ所緣^ニ一々心之所緣又非^ニ一々心之所緣^ニ不二心

之所證而已文可^レ知一々心ノ所緣^ト者真如約密ノ義邊

也非一々心之所緣^ト者真如約顯之義邊也^ト云事豈

及^ニ異論^ニ乎

答先ノ重^ニ雖^レ出^ト兩門跡ノ異義^ヲ且^ク任^ニ相承ノ傳^ニ真如^ハ唯局^ル顯^ニ

之義^ヲ可^ニ存申^ニ也以^レ留^ヲ遮情之空理^ニ為^レ顯^ヲ以^レ顯^ヲ表德ノ實

義^ニ為^レ密^ト事顯密ノ大^{ナル}界畔也緣起性德ノ差異專在^ニ此處^ニ

者也而^ニ思^ハ真如門^ヲ一相一寂ノ法門無相無念ノ境界也

是則非^ニ顯乘ノ極理遮情無相ノ分齊^ニ乎是以宗家ノ釈^ニ判^ニ

第九ノ住心^ヲ之時或^ハ云^ニ真如生滅歸此岑^ト或判^リ三種圓

融佛優遊^ニ二門境^ト是等ノ釈豈非^ト以^ニ真如門^ヲ一定^ル中^ニ第九住

心^ト且^ハ第一卷ノ性修ノ判文分明^{ナル}者乎但至^下引^テ言語心

量離不離ノ文^ヲ為^中顯密ノ證文^ト者真生不^ニ三門^ハ自^レ元^ニ

六十五丁右

六十五丁左

法ノ上ノ三重ノ義也故ニ見レハ四言九心離絶スト真如無相ノ極理

也此上ニ見レハ以テ如義一々心ノ縁詮スト彼位ヲ即表徳ノ實相ニシテ成

不ニノ法門ト也以ニ如義一々心ノ縁詮ノ境界ヲ猶為トハ真如門ト

不レ可ニ意得一次至開題ノ釈ニ者如ク第二卷ノ論釈ノ料簡ノ也上

所ノ挙ル法佛ノ三密曼荼ノ四身者不ニノ法門也表徳ノ實相ナル

故ニ至レテ下ニ縁レ彼心ヲ云ニ一々心ト是可ニ不二心ナル故非ニ真如一

々心ニハ也次ニ非ニ一々心之所縁ニ者非ニ前ノ一々心ニ是通妨ノ

釈也云ヲ一々心之所縁ト可レ思フ真如一々心坎ト故ニ通妨シテ

彼云下フ非ニ真如一々心ニハ不二一々心ト也凡於ニ一々心ニ有ニ

真如不二ノ二箇ノ一々心ニ故ニ不レ可有ニ相違ニ

重難云凡開ニ宗家處々ノ解釈ヲ以ニ如義語ヲ為シテ自性法身ノ

所用ト但定ニ説ク密ヲ言語ト事敢以無ニ異論ニ是故ニ教論ニハ云ニ

唯有自性法身以如義真實言能説是絶離境界是

各真言秘教謂金剛頂等經是也ト聲字義ニハ以ニ真妄ニ

語ニ判ニスル顯密一時以ニ龍猛五種ノ言説ヲ為ニ彼證文ト而ニ如義語ト

者真如門ノ言語也若以ニ如義ヲ定メハ不二ノ言語ト今論ノ解釈

分ハ唯釈四法ノ故ニ後重ノ一心ノ下ノ二法二門ノ分齊也釈ニ彼ノ

六十六丁左

真如門一之時明ニ真如離絶之相ヲ約ニ生滅四言ノ分齊ニ述ニ

言語離絶之旨ヲ若約セハ自門一以ニ如義語ニ云レ可レト説也非無

自門言説及念ノ論釈專顯ニ此意ニ也若此ノ如義語為ニ不

二ノ言語ト真如門ノ廣說段ハ不二ノ說段ニシテ可レ非ニ真如門一非レ背ニ

唯釈四法ノ論ノ大旨ニ乎其上以ニ維摩ノ無言一證ニ第五ノ如義

語一^{ヲ見リ}如義若不二ノ言説^{ナラハ}直ニ述ニ表德ノ實相^ヲ言語也豈無

言顯理ノ分齊乎定知^ヌ第五ノ如義語ニ有ニ約顯約密ノ二義一

故ニ或判^シ自性法ノ身ノ所用^{トモ}或以^テ維摩ノ無言^ヲ證^レ之也若又

如義ハ必ス不二ノ言説^{ナルカ}故ニ云レ不^ト通^レ顯^ニ者本論ニ答^{トシテ}隨順ノ問^ヲ雖

説無有能説可説雖念亦無能念可念^文此雖説ノ々々ハ

六十七丁右

論ニ釈^{セリ}如々々説^ト非ニ如義語ニ平若尔者本論既ニ出^ス真如

隨順ノ言説^ヲ何如義語非ニ真如ノ言説^ニ乎其上三語心量ハ

一雙ノ法門也論ニ第十ノ一々心^{ヲハ}引^テ本有經ノ甚深真諦⁶非

餘境界唯自所依縁為境界ノ文^ヲ證^レ之若如^{ナラハ}所立^ノ甚深

真諦者指^ニ不二^ハ坎^ニ不二^ハ有^ニ何^ナ所依^ニ云^フ唯自所依縁為

境界ト乎設又以_二不_二ヲ雖_レ為_三所依_ト不_二ハ三十二ノ通所依

也簡_レ何_ニ云_二自所依_ト乎明_ニ知真如門ノ理_ハ自門_ニ無_ニ心念_一故_ニ

自所依ノ真如所入縁_レ之為_ニ境界_ト簡_ニ生滅所入_ノ他所依_ニ

非_レ云_ニ自所依_ト乎加之宗家住心論_ノ中_ニ第九_ニ引_ニ四種_ノ大

鏡ノ文_ヲ第一如實空境_ヲ注_シ此表真如門_ト第二ノ因熏習境_ヲハ

注_シ此表生滅門_ト畢釈_ニ佛花所說三種世間圓融之佛

則四種鏡中當第二也_ト若真如門定_メ為_ハ第九住心ノ所

攝_ト初二種鏡俱可_レ當_ニ第九_ニ何設_シ當第二也ノ簡別ノ之釈_一

乎真如門_ハ有_ニ約密_ノ義_一故_ニ其義不定也付_ニ治定_一且_ク有_ニ當

第二也ノ判釈_ヲ又先德釈_ニ一鉢一心摩訶衍_ヲ判_ニ第九

住心所攝第十住心淺畧也_ト真如門法_ハ第九第十ノ

二箇ノ住心_ニ事解釈無_ニ異論_一者乎但至_レ云_下以_ニ縁起性德_ヲ

為_ス中_ト顯密ノ差異_ト者自_レ元所_レ不_ニ争_申一也於_ニ真如門_ニ論主ノ御

意顯相_ハ雖_レ約_レスト顯_ニ纔_ニ兼_ニ存_ニ密義_ヲ故於_ニ真如一門_ニ存_ニ縁起

性德_ノ二義_ヲ也三十二修行種因海_ト者約_ニ顯相_ニ一途ノ

判文也然_{トモ}論主於_ニ此_ニ絶離ノ境界_ニ說_テ存_ス為_ス密藏_ト之旨_ヲ故_ニ

六十七丁左

六十八丁右

有^ル言語心量離不離ノ判釈^一也次至^レ云^二真如門ハ一相^一

寂法門也^一者自^レ元難者ノ意開^二立^{スル}三十三ノ法門^一ヲ面^ハ以^二無

相至極ノ位^一ヲ為^二真如門^一故^二一相一寂ノ法門^一事^ヲ所^レ不^二争申^一

也而諸教ノ絶離^{スル}ハ何^ニ故^ソトナラハ諸教^ハ自^レ元随他意^ノ教^{ナル}故^二凡夫ノ妄

情^ヲ為^レ本所^ニ建立^{スル}也而^二漸^ニ為^レ令^カ入^二不^二廢^{シテ}諸教^一ノ建立^ス云^フ

真實ノ法^ハ無相離念^ノ之境界^ト之處^ニ有^二顯^ス密^ヲ之意樂^一也

故^ニ為^ス離絶ノ境界^ト之邊^ハ顯教所^レ顯真如ノ實^ハ密ノ法門也

挾^テ此^ノ二分^一立^ルカ^二真如門^一故^於真如門^ニ云^レ有^二顯密^一ノ二義^一也

次至^二真如生滅^一歸此^ノ岑^ノ釈^一者古來ノ會通^ニ云^二真如生滅^一

者非^ス真生二門^一以^テ生滅ノ中ノ四無為五有為^一云^二真如生

滅^一也故所歸ノ處^ヲ云^二風水龍王^一法界^ト風水龍王^ト者生

滅所入也論ノ第二^ニ出生光明龍王^ヲ云^二真如所入^一出生

風水龍王^ヲ云^二生滅所入^一故^二一法界^一言^モ可^ト無盡^一法界^{ナル}

云^二設又真如生滅^一雖^モ常ノ真生二門也^一自^レ元真如門ノ第

九ノ住心^{ナル}事^ヲ強^ニ不^二遮申^一之上^ハ不^レ可^レ成^レ難^ト次^ニ優遊二門境^ト

者又可^レ准^レ前^ニ次^ニ云^二真如離絶ノ位^一說^ケハ成^ト不^二事其義又

所_レ不_レ遮也然_{トモ}論ノ第二卷ニ於_ニ真如門ノ廣說段ニ所_レ出如義
語ハ見_ニタル真如門ノ言語ト事分明故ニ如義語ノ所說ハ猶真如門ニシテ
非_ニ生滅ニ所_ニ成申_一也次至_ニ開題ノ釈_一者法佛ノ三密曼荼羅ノ四
身即真如ノ躰故ニ縁_ニ之_一々々モ可_ニト真如所入ノ心念ナル存申
也三密四身ヲ属_ニシテ不_ニ二不_レトハ通_一真如ニ所_レ不_ニ共許申_一也次上

六十九丁右

下ノ一々心忽ニ相違ト云事尤所_レ難_レ思也於_ニ一具相連ノ文ニ
一々心ノ名字豈可_ニ相違ス乎故知ヌ以_ニ一々心_一或ハ属_レ密ニ或ハ
属_レ顯ニ是則約顯約密ノ誠證也凡一々心者真如所入ノ
十名ノ中ノ第十ノ是_一一_二心也_一¹⁰是既_ニ真如所入ナル事無_ニ
異論_一之上ハ十種ノ心量ノ中ノ第十ノ一々心何忽相違_{シテ}出_ニ不_ニ
二心_一乎

六十九丁左

答思_ニ三十三ノ法門ノ縁起_一不_ニハ性德ノ根源住_ニスル諸法ノ自位_一
之位也而_ニ為_レ機ノ施設_{スル}時_ニ為_ニ無相離念ノ機_一開_ニク兩重八種ノ
真如門_一為_ニ之_一所依_ニ之位_一名_ニ真如所入_一故_ニ真如門法_一或ハ
云_ニ縁起因分_一或ハ云_ニ有機有教_一也若尔者逗機施設ノ真
如門ノ中ニ含_ニ説_一ト性德圓滿ノ密_一云事大_ニ背_ニ立教ノ大旨_一者乎

就_レ中約密ノ真如ハ非_二不_二猶可_レ云_三真如ト坎將又以_二不_二一_一

含_二說_{スル}真如ノ中_二坎若雖_二約密也_ト猶云_二ハハ_一真如門ノ分齊_{ナリト}者_三

十三ノ法数増_テ可_レ成_二四十九_一法門_ト可_レ増_ス約密ノ真如ノ十六

数_一故_二雖_レ云_二真如_一其躰分_二顯密_二不可_レ云_二一種_ト故_二若云_三含_二

說_{スト}不_二一_一者約密ノ邊_ハ即不_二也何於_二真如_一有_二約顯約密_一

之_二義_一乎又約密ノ真如_ハ於_レ云_二有_二機根故有_二教說_ト故_二三

十二ノ法門ノ中_二存_レ之_一坎若尔者同_ク密ノ法門_ニ何不_二一_一云_二離

機根故離教說故_ト真如ノ約密_ヲ判_二スル_一有_二機有_二教_一乎不_二一_一離

機根既_二遮_二顯機_一之詞也真如ノ有_二機根_一定_メ可_レ指_二ス_一顯機_ト之

詞_上文句ノ相對分明_{ナルカ}故若尔者顯機ノ所_レ及_フ真門爭_カ可_レ存

レ密_ヲ乎若又彼論釈_ハ且付_二約顯_一真如_ニ云_レ作_二ト_一彼釈_ヲ者不_レ尔

彼ノ問答_ハ於_二立義所立_一三十三ノ法門_ニ問_二答_{スル}不_二一_一三十二_ト

界畔_ヲ也立義所立ノ真如門ノ分齊不_レ可_レ有_レ所_レ漏_{ルル}立義分ノ

真如門_ニ不_レ存_レ密_ヲ至_二釈_{スル}彼_一解積分_ニ何忽_二撰_レ密_ヲ乎旁以難

レ思宗家引_二論釈_ヲ備_{玉フ}顯密ノ誠證_ニ文四處也_一一卷ノ得不_レ

文_ニ一_一真如門ノ廣說段ノ言心離不離ノ文_ニ三_一五卷ノ五重問

七十丁右

答ノ文四ニハ第十卷ノ性海因海撰不撰之文也而三處ノ文ハ

七十丁左

以ニ二ヲ為レ密ト以ニ三十二ヲ為レ顯ト何局ニテ真如ノ廣說段ニ忽ニ下
為ニ縁起因分ニ之真如上ヲシテ密ト備ニ顯密ノ誠證ニ乎於ニ一師ノ解

釈ニレ可レ成ニ銚楯ノ道理ノ至極也是以宗家ハ釈ニ能撰大乘
者不ニ二大乘所撰大乘者ニ重三十二大乘ト先德判ニシ玉エヘル

不ニ二ハ真如常住三十二ハ生滅無常ト宗家先德ノ釈ノ中ニ判ニ

顯密ニ之時以ニ不ニ二ヲ為レ密ト以ニ三十二ヲ為レ顯事溢レ眼ニ滿ラ耳ニ
何處ニカ分明ニ有下ル以ニ真如一ヲ為レ密ト判文上乎拘ニ真如門ノ廣說段ノ

顯文ニ似レタル忘ニ立教ノ大經ヲ但至レニ云ニ如義語ハ真如門ノ言語也一
者馬鳴ハ顯ノ祖師故ニ以ニ諸教絶離ノ境界ヲ為ニ真如門ト龍樹ハ

傳レ密ヲ元祖ルカ故ニ為ニ顯諸教ノ絶離ハ密藏ノ本分ナル事ヲ因ニ出下ス說ク絶

七十二丁右

離ノ境界一之言語上も彼絶離ノ境界者即不ニ二摩訶衍ナルカ故ニ

說レ之ヲ言語ハ即不ニ二ノ言語也故ニ本論ハ留テ離言離心ノ重ニ不
レ出ニ三可言可念ノ說念ヲ釈論ハ分明ニ既ニ判下シテ離言離心ト者約ニ四

言九心ニ談也上若約ニ二如義一々心ニ於ニ此絶離ニ云レハ可レ有ニ可
言可念之說念ニ彼說念ノ境界ハ非ニ二真如ノ重直ニ不ニナル故ニ成ニ

不二ノ言心ト也設雖^二トモ真如門ノ說段也ト因^レ便^二顯^スハ密意^ヲ今論ノ

通例也如^二彼五重問答^ノ雖^二トモ生滅門ノ四法熏生ノ中ノ白品¹²

相熏門ノ問答也ト及^フ前重不二ノ問答ニ況又真如門ハ因^レ絶

離ノ境界^ニ判^{スル}離絶之分齊^ヲ之時可^レ出^二可說可念ノ言心^ヲ之

條說文ノ次第非^レ無^二其次^ニ何ソ強^ニ真門ノ說段ニ致^{サシ}云^レ交^ニト不二^ヲ

難上^ヲ次至^レ云^下本論ノ中^ニ於^二真如門^ニ出^ト說念^ヲ者彼說念^ヲハ論^ニ

判^レ無^二シト能所^ニ故^ニ論^ニ云無^レ有¹³能說可說如々々說文是則

以^二無言^ヲ云^ニ如義^ト也若有^二言說^一者何無^二能說可說^一乎三

師ノ解釈此意也凡真如門ハ無相絶離ノ法門ナル故以^二無言^一

為^二言說^一以^二無念^一為^二心念^一云^{トモ}如義語ノ說^ト旃示^二不說之義^一

也宗家ノ意ハ不^レ尔^ヲ以^二言語心量^一離不離^ヲ為^二顯密ノ誠證^一事ハ

離不離大^ニ各別^ニ可^レ成^二其ノ誠證^一也但至^レ云^下以^二如義^一為^二不^レ

二ノ言語^ト真如門ノ廣說段可^ト不二ノ說段^上者其理先立^テ顯^シ

畢真如門ノ廣說段^ト者示^ス三離ノ相^一也因^レ彼ノ三離ノ說^ニ以^レ出^ヲ

不二ノ說念^ヲ何強^ニ責^レ可^ト不二ノ說段^一乎設^ニ因^レ便^ニ釈^ヲ聖教ノ常ノ

習也難端頗似^下拘^二一隅^一忘^ル中^ニ作釈ノ巧妙^ヲ次至^レ云^下以^二維摩^一

七十一丁左

七十二丁右

如義^ヲ證^{スト}第五ノ如義^ヲ者付^レテ之^ニ有^ニ二義^一ニハ非^ニ第五ノ如義ノ證^ニ
 第五ノ如義^ヲハ以^ニ三昧經^ヲ證^シ之^ニ維摩經^ヲ為^ニ證^ニ本論ノ因言遣^ニ
 言^ヲ所^レ引也本論ノ因言ノ々^ヲハ雖^レ釈^ト如々々說^ト本論顯論^{ナルカ}故
 可^ニ無言ノ如義^{ナル}也故以^ニ淨名ノ無言^ヲ證^レ之^ニ不^レ同^セ云^ニハ三昧經ノ
 我所說者義語非文^ト一^ニハ自宗ノ意^ハ以^ニ淨名大士^ヲ習^ニ西方ノ
 語菩薩^ト故無言^ト者且^ク顯機隔^ル聽^ヲ之邊也實^ニ說^ニ不二^ノ法^ヲ
 故文殊讚印^{シテ}云^ニ如言說如々耳聽如^乃至斯乃真實不
 二法門斯乃真實不二法^ト如義ノ所說^ハ不二^{ナル}事還^テ以^ニ
 此文^ヲ可^レ為^ニ良證^ト矣次至^レ云^ニ本論^ニ有^ト如義^一者顯人不^レ知
 密^ヲ之義邊^{ニテ}四言ノ上^ニ且^ク與^ニ如義ノ名^一也五種ノ言說相對^{シテ}分^ニ
 別^{セン}真妄二語^ヲ之時不^レ可^レ屬^ニ真語^ニ故^ニ如^ニ三^ハ彼ノ宗輪論^ニ云^ニ諸
 佛說法無非如義^ト設^ヒ生滅門ノ法門^{ナリトモ}有^下云^ニ如義ノ說^ト之義^上
 然^{トモ}非^ニ今ノ第五ノ如義^ニハ若尔^ハ不^レ可^レ依^レ云^ニハ如義^ト次至^ニ本有經ノ
 文^ニ者凡不^ニ諸乘ノ根本無盡莊嚴ノ本位也故^ニ三乘^一
 乘ノ諸乘^ハ皆一切智々無量乘ノ淺畧ノ義門也故^ニ為^ル真如ノ
 所依^ニ真如ノ秘密趣為^ニ生滅ノ所依^ニ生滅ノ秘密趣真言ノ無

量乘ニ一々ニ具レ之如下於二十住心ニ各有顯畧趣秘密趣^上故ニ

知^ヌ顯ノ無相ノ真如門ハ心念離絶ノ境界^カ故ニ於^レテハ顯ニ無^シ緣^{スル}之

心念ニ自心所依ノ秘密趣ニ具ニ足^{セリ}三密^ヲ以^ニ彼ノ意密^ヲ緣^{スル}之時

無相ノ境界ハ成^ル秘密趣ノ法門ト也故ニ云ニ唯自所依緣為境

界ト以^レ云^ヲ不二不可^レ云^下無差別ノ相一味ノ法^上トハ緣起因分ノ法

門ハ皆各從^ニ性德ノ根源^ノ所^ノ流演^{スル}淺畧義門^カ故ニ各可^レ有^ニ深

秘ノ所依ト也但此段ハ愚推ノ一義也或ハ又自所依ノ言^ハ未^下タ必^シモ

云^中於^テ所依^ニ有^中自他^上能依ノ真如門^ヲ簡^ニ他ノ生滅^ニ云^レフ自許リ也

古來會通如^レ斯次至^レ云ニ甚深真諦^ハ指^ト不二^ヲ者先被^ル呼^ハ

甚深真諦^一之法^ハ真如門也成^ル自所依ノ所緣^ト之時^ハ不二

也所詮一法^ノ上^ニ有^ニ真妄^ノ二分^一妄ハ生滅門遮^{スル}ハ彼^ヲ真如門

遮^{シテ}妄^ヲ所^ノ顯實躰^ハ不二也但至^ニ當第二也^ノ釈^ニ者彼ノ釈ノ末^ニ

次二種鏡於此住心無用故^文此釈ノ所^ノ顯^ス初二種鏡^ハ

此住心ノ所用也^{問タリ}第一鏡ニ若無用^{ナラハ}何必云^ニ次二種鏡

無用^ト乎還^テ答^者ノ潤色^{ナル}者乎但云^ニ三種世間圓融之佛

當第二也^ト故^ニ第二鏡ノ三種世間熏習一覺ノ義殊^ニ順^カ第

七十三丁右

七十三丁左

九ノ住心ニ故以ニ此一邊ノ義ヲ釈ニ當第二也ト也凡以ニ真生ニ門配ニ花嚴一宗ニ之時真如門ハ當リ果性不可説ノ重ニ生滅門ハ可レ當ニ因分可説ノ重ニ三種世間熏習一覺ハ因分可説ノ法門ナルカ故釈シ玉フ當第二也ト也此上ニ有ニ果性不可説ノ重ニ真如門何ノ法門ソ乎次至ニ先德ノ釈ニ者彼具ナル釈云問前重一心法界十住心中何所撰耶答有二義一第九住心所撰也二第十住心浅畧也此釈ハ未ニ必指ニ一鉢一心ヲ一心三大相望シテ以ニ一心一判シ玉ヘリ為第九（住）¹⁵心第十住心ノ浅畧ト是則於三十三ノ法門ニ顯密ノ廢立重々ナル中ニ一心ヲ為レ密ト三
大義ヲ為レ顯ト之義門也彼一心ニ撰ニ真生ニ門ヲ故ニ未ニ必真如門ヲ為レ密ト也故ニ一心法界ヲ不レ可レ定ニ一鉢一心ト也故ニ於テ花嚴ト三十二ト判ニ同異ヲ之時同ク無明ノ分位故同ク應化佛所説等^云若真如門通レ密ニ者何一向定ニ無明ノ分位ト云ニ應化佛所説ト平所詮義門不定ナル故以テ一邊ノ義ヲ不レ可レ為ニ難勢ト一處ニ三十二ノ法門ニ加ニ後重ノ四法惣ヲ判シ玉ヘリ三十七尊ノ三摩地ト依ニ此釈ニ者於ニ生滅門ニ可レ云レ有ニ約顯約密之義ト

七十四丁右

乎

七十四丁左

一先德指事花嚴與三十二同異ノ釈ノ事

問真如若一向局レ顯_二者三十二_一花嚴ト不_レ可有_二異_一義_二其

上於_二異出_一七種_一中_二多分_一以_二真如_一別_二花嚴_一知_二真如_一通_二

密_二故異_一花嚴_二也_一爲_二言_一答約_二法門_一分齊_二者三十二_一法門不

レ可有_二勝_一花嚴_二之分_一然_二今論_一居_二權實_一中間_二兼_一顯密ノ兩際_一

故以_レ知_二密_一爲_二三十二_一勝_二花嚴_一之分_二也_一故七異ノ随_二一_一云ク

彼_ハ不_レ知_二後住心_一此知_二後住心_一云_二此意也若云_一異ノ時_ハ以_二

真如_一爲_二密_一者何_二云_一有_二後住心_一乎而_二三十二_一分齊_ハ未_レ及_二

第十ノ住心_二故_一云_レ不_レ知_二後住心_一也以_レ之_二推_一餘ノ異_一皆可_二知_一

後住心_一之分齊_上又彼但淺畧無明分位此通淺深明

無明_云無明_ト者五重ノ問答也彼_ハ以_二不_一爲_レ明_ト全以_二真

如_一不_レ爲_レ明_ト可_レ知_二以_レ云_一通_二明_一不_レ可_レ云_二真如_一異_二花嚴_一故知

今論_二三十二_一知_二有_一不_二故異_一花嚴_二也_一爲_二言_一

一問約密ノ真如_ト者其躰何物_ソ乎 答古來ノ義云淨菩

提心ノ遮情無相也云_ハ得談真理_一非_二異_一真如門ノ廣說段_二

七十五丁右

之説^上唯真如門ノ廣説段ハ顯教ノ極理無相ノ境界^カ故四言

九心絶離^ス如^ニ花嚴ノ果性不可説^一也約密ノ真如^ト者法身

如來以^ニ如義語^ヲ説^ク淨菩提心ノ上ノ遮情無相ノ法門^ヲ也無

相ノ義等^{シキ}故^ニ名^ニ真如門^ト約^レ顯^ハ無相ノ極理^ハ妄言不^レ及故^ニ云^ニ

離言^ト約^レ密^ニ無相ノ境界^ヲ説^ニ淨菩提心遮情ノ義也^ト故^ニ云^ニ後

一言説得談真理^ト也一義云^ハ約密ノ真如^ハ密ノ表

德也其故ハ約顯約密ノ義ノ起^リハ金剛頂經ノ開題ノ釈也以^ニ

々心^ヲ一度^ハ云^レ緣^ト密^ヲ一度^ハ云^レ不^レ緣^セ密^ヲ故^ニ而^ニ彼ノ所緣ノ密^ト者

法佛ノ三密曼荼羅四身也三密四曼ノ牀豈非^ニ表德^一乎其

上約^{シテ}顯^ニ云^ニ不^レ説^ト約^レ密^ニ云^フ得談^ト當^ニ二教論ノ如是絶離並

約^ト位談非謂果人也ノ釈^ニ彼ノ重^ヲハ二教論^ニ謂因位人四

種言語皆不能及唯有自性法身以如義真實言能

說是絶離境界是名真言秘教金剛頂等經是也^云

四種言語皆不能及^ヲ論^ニ云^ニ前四言説虚妄説故不能

談真^ト唯有自性法身以如義真實言能說是絶離境

界^ヲ論^ニ云^ニ後一言説得談真理^ト也金剛頂等ノ説豈非^ニ表

七十五丁左

七十六丁右

德ノ法門ニ乎又顯密二教ノ界畔ハ源在リ遮情表德ノ二重ニ而ニ
以テ言語心量ノ離不離ヲ為スル顯密ノ差異ト之意非レ云ニ言語

心量ノ離顯不離ハ密ト乎若ルハ不離ノ位ハ可下シ顯ニ表德ノ法門ナル上

問ル者約密ノ真如ト不二ト如何別ナル乎 答此ニ有二義一ニハ
真如ハ淺畧不二ハ深秘也

一云〈私〉不二ト云時モ盡シ密ノ法門ヲ真如ノ約密モ又盡シ密ノ法門ヲ

故法門ノ分齊ハ同也然トモ立ル真如ト之時為レ顯ニ諸教ノ絶離ハ密

藏ノ本分ナル事ヲ真如ノ處ニ有下リ含ニ説スル密ヲ密一之意上顯ニ彼所含ノ密ヲ云ニカ後

一言説得談真理ト故ニ強ニ不レ可局ニ密ノ淺畧ニハ也 問ル者

約密ノ真如モ其躰當ニ不二ニ諸教ノ絶離ヲ説ケハ成ニ密藏ト其密藏ト

者不二也ル者蓮花院ノ義モ又ル也何強ニ云ニ真如ノ約密ト

乎 答蓮花院ノ義ハ四言九心ノ絶離ニ位ヲ説ケハ成ニ密藏ノ不二ト

也花遊院ノ義不レル四言九心ノ絶離ノ真如ノ處ニ存ニ密意ヲ故

猶為ニ真如ノ撰属ト其躰ハ雖トモ不二也ト被ルル含ニ説セセ故ニ猶云ニ

真如ト也是只教相ノ建立也法躰ニ非レ有ニ差異ト若約ニ法躰ニ

只不二ト真如ト生滅ト三重也約密ノ真如若不二ト外ニ存ニハ別

躰^ヲ可^シ四重^{ナル} 夫豈^ハ尔乎 問^ル者本論ノ真如^モ含^ニ說^{スル}密^ヲ欤

設^レ說^モ密^ヲ云^ハ不^レ違^セ唯^ニ釈^ニ四法之論^ニ故 答^ハ是^ハ又有^ニ一

義^一 一^ニ 本論ノ真如^ハ唯^ニ顯^ニ也 釈論^ハ於^ニ此^ノ真如^ニ釈^ニ說^{ケハ}成^ト密藏^ト

故^ニ真如^ニ令^レ含^セ密^ヲ諸教ノ絶離^ヲ云^ハ密藏ノ本分^ト之時^ニ諸教ノ絶

離^ト者顯教ノ極理^{ナルカ}故^ニ局^レ顯^ニ從^ニ密^ノ眼^一見^{レハ}之^ヲ見^ニ成^ス密藏ノ本分^ト

也^一 一^ニ 本論^モ内鑒^{冷然}故^ニ非^ス不^レ知^レ密^ヲ故^ニ真如ノ顯相^ハ約^レ顯^ニ

密意^ハ挾^ニ密義^ヲ也 龍樹探^ニ出^{シテ}此^ノ密意^ヲ舉^ル密^ノ言^心也^一 矣

一問^ニ以^ニ真如門^ヲ為^ニ花嚴^一之時^ハ為^ト果性不可說ノ重^ト者肯^ニ

花嚴宗ノ意^ニ欤彼ノ宗^ハ以^ニ真如門^ヲ定^ニ頓教ノ分齊^ト是三乘教ノ

極理也未^レ及^ニ一乘^一如何 答清涼^下釈^ト天台^ニ立^ニ四教^ヲ花

嚴^ニ立^ニ五教^ヲ事^上天台^ニ所^ニ以^レ不^レ立^者以^ニ三^{ナリ}四教^ノ中^ニ皆有^ニル^ヲ一絶

言^一今乃開^ク者別^ノ為^ニ一類離念ノ機^一故即順^ニ禪宗^ニ以^ニ此^ヲ

真如門ノ絶言無相ノ理^ヲ天台^ニ為^ニ四教ノ各々ノ極理^ト故圓教ノ

極理^モ有^ニ此^ノ真如門^{ナル}之義^一又以^ニ真如門^ヲ配^ニ禪宗^ニ而^ニ宗密

釈^ニ禪門^ヲ或^ハ為^ニ頓教ノ分齊^ト或^ハ為^ニ圓教ノ極理^ト云^ハ故^ニ知^ル宗家ノ

御意物^レ諸教ノ絶離^{シテ}ハ為^ニ花嚴ノ極理^ト故^ニ撰^ニ花嚴^ニ之時^ハ為^ニ

七十七丁右

七十七丁左

果性不可説ノ重ト也不レ取_下別_{シテ}為_ニ一類離念之機_ニ立_ル真如

門_ト之邊_上ヲハ坎_矣

此論義ノ大意ハ真如門ノ廣說段ニ明_ニトシテ_ハ躰真如ノ理ノ離絶之相_一ヲ

離言說相_乃至_ニ離心緣相_文論_ニ出_{トシテ}五種言語_ト十種ノ心量_トヲ

離言離心者約_ニ四言_ト九心_ト一約_{スレハ}如義_ト一々心_ト一有_下リ_リ説_ニ真躰_一

之言說_上有_下緣_{スル}真躰_一之_上心量_{モ云}此如義語一々心_ヲ花遊

院ノ義_ニテハ思_ニヘリ直_ニ真如門ノ言語心量也_ト其故_ハ今論ノ解積分ハ唯

積四法_{ナル}故_ニ所積不_レ可_レ出_ニ真生_ニ門之分齊_一故知_ヌ如義

語一々心ハ真如門ノ言心也_ト云事而_ニ宗家如義一々心ノ

所_ニ緣_註法門_一判_ニ密藏_一言語心量離不離之義此論明

說顯教智者詳而解迷ノ之指勸ノ文以_テ言心ノ離不離_ヲ為_ス

顯密ノ界畔_ト故_ニ知_ヌ如義一々心ノ緣詮_ハ秘密ノ義也_ト云事若

尔者以_ニ真如ノ理_一可_レ為_レ密_ト也加_レ之金剛頂經ノ開題_ニ初_ニハ云_下

法佛ノ三密_ハ四種ノ言語_モ不_レ說曼荼四身ハ九種ノ心量_モ不_レ緣_上

此_ニ積_ニ既_ニ雁_{セリ}積論ノ前四言說不能談真初九種心不緣

真理之文_一以_ニ躰真如ノ理_一為_ス法佛ノ三密曼荼ノ四身_ト之條

七十八丁右

分明也又至^レ下^ニ非^ス九種^ノ心量^ノ所縁^ニ一々心^ノ所縁也^ハ是^ハ真

七十八丁左

如^ノ約密^ノ義也^ハ非^ニ一々心^ノ所縁^ニ不^ニ二心^ノ之所證而已^文是則真如

約顯之義也^ハ以^ニ一々心^ノ為^ス所遮^ト也 問於^ニ真如門^ニ有^ニ約顯

約密^ノ義^一者顯密^ノ理其躰同^{ナル} 坎將又顯密^ノ二種^ノ理^ヲ合^{シテ}立^{タル}

真如門^一坎又約密^ノ真如^ハ直^ニ不^ニ二理^ノ坎如何

答此事花遊院^ノ義^ノ古來^ノ難義也一義云以^ニ無相寂滅^一

定^ニ真如門^ノ理^ト而^ル上^ハ置^テ此^ノ寂滅之理^ヲ顯^{トモ}密^{トモ}可^レ見^ル也見^ル密^ト

之時^ハ初地^ノ遮情^ノ法門也非青非黃等^ノ初地^ノ遮情^ヲ為^ニ第

八^ノ住心^ノ說文^ト故知以^ニ一種^ノ理^ヲ可^レ云^ス通^ニ顯密^ニ也故^ニ約密^一

真如^ハ非^ニ不^ニ二理^ニ也 問尔者開題^ノ法佛^ノ三密^ハ四種言

語^モ不^レ及^等釈如何三密四曼豈^ニ遮情^ノ法門也^ト乎

答遮情^ト者自^レ元遮^{スル}表德^ノ上^ノ情計^ヲ之法門也故^ニ於^ニ三密

四曼^ノ法鉢之上^ニ見^レ不^レ說不^レ緣^ト者遮情也得談得緣^モ云^カ

緣^ニ詮^ス不^レ說不^レ緣^ノ處^ヲ故^ニ猶遮情^ノ之分也一義云於^ニ真如

門^ニ有^ニ約顯約密^ノ義^一事^ハ云^ス諸教^ノ絶離^ハ密藏^ノ本分^ト同重^ノ法

門也諸教^ノ絶離約顯^ノ真如也密藏^ノ本分^ハ約密^ノ真如也

七十九丁右

此義^{ニテハ}約密ノ真如ハ表德ノ躰也開題ニ如來ノ奧地ハ闢ニ廢詮照

潤ノ心地ニ佛樹王ノ芽ハ生^ス言亡慮絶ノ空性^{ニ云}是則諸教ノ絶

離^{ヲス}為^ル密藏ノ本分一釈也既ニ或云ニ如來奧地ト或云ニ佛樹王

芽ト豈ニ遮情無相之空理ノ分齊ナラン乎故ニ知顯ノ遮情ノ理密ノ表

德ノ理トヲ合^{シテ}立^ニ一種ノ真如門^一也問此義ナラハ表德ノ理也

直ニ非^レ指^ニ不二ノ理^一乎答於ニ表德ノ理^ニ可^レ有^ニ淺畧深秘ノ二

重^ニ不二ハ深秘ノ重約密ノ真如ハ淺畧ノ重也次蓮花院義ノ意ハ

思^ニ三十三ノ法門ノ縁起^ヲ不二ハ諸法ノ居^{スル}本位^ニ性德圓滿ノ位

也真如門ト不二ノ法門トハ非^ニ機ノ所知^ニ故^ニ立^{ニテ}無相ノ名相^一施設

假立^{スル}位也以^{ニテ}假立施設ノ法門^一不^レ可^レ為^レ密^ト故^ニ真如ハ唯局

レ顯^ニ也故^ニ宗家引^テ論ノ第一第五第十ノ文^一判^{スル}顯密ノ優劣淺

深^ヲ之時密藏ハ唯局^ニ不二^{ニ見リ}且^ク以^{ニテ}縁起性德^一為^ス顯密ノ差

異^ト不^レ可有^下以^{ニテ}真如門^一為^ス性德ノ法門^ト之義^上但此義ノ難義ハ

以^ニ如義一々心^一為^ス密^ト言^ハ心^ト教王經ノ開題^ニ以^ニ一々心^一為^ス密^ト

秘密ノ能縁ノ心^ト也先ツ真如門ノ廣說段ノ如義一々心ハ非^ニ真

如^ノ言^ハ心^一直^ニ不二^ニ言^ハ心也其故ハ凡真生不二ノ三重ノ法門ハ

七十九丁左

八十丁右

先ッ應化佛任^ニ凡夫ノ謂情^ニ以^テ隨他意語ヲ所^ノ施設安立^{スル}諸ノ
 法門ハ生滅門也此^ノ所^ノ施設^{スル}法門ハ非^カ佛内證智ノ境界^ニ故^ニ
 悉遮^ニ遣^{シテ}之未^レ顯^サ表德ノ理^ハ之位^ノ一相一寂無相ノ重^ヲ云^ニ離
 言離心^ト此位^ヲ為^ニ真如門^ト故真如ノ理^ハ絶^{シテ}離^ニ他ノ生滅ノ四言
 九心^ハ未^レ及^ニ如義一々心ノ緣詮^ニ之重也故^ニ本論^ニ說^テ躰真
 如ノ理^ヲ云^ニ離言說相離心緣相等^ト也然^{トモ}此ノ絶離^ハ遮^ニ機情^ヲ
 之法門也超情ノ境界ハ万像歷然^{タリ}是^ヲ云^ニ性德輪圓之法
 門^ト又云^ニ無盡莊嚴^ト也此位^ヲ云^ニ不二摩訶衍^ト故^ニ真如
 門ノ廣說段ハ因^レ明^ニ真如ノ離絶^ヲ說^ク此位^ヲ示^{サントシテ}下^ニ不二成^ニ密藏^ト之
 義^上出^ス如義一々心^ヲ也是則本論ノ顯論^{ナル}故^ニ當^ニ離言離心ノ
 之位^ニ即諸教ノ絶離也釈論ハ兼密^ヲ故^ニ為^レ顯說^ニ諸教ノ絶離^ニ
 為^ス密藏ノ之本分^ト之義^上更^ニ加^テ如義一々心^ヲ云^ニ緣^ニ詮^ス之^ヲ也
 以^テ言語心量ノ離不離^ヲ為^ス顯密ノ差異^ト不二^ヲ為^レ密^ト三十二^ヲ
 為^ス顯^ト同^シ通^リノ法門也 問尔者云^ニ後一言說得談真理
 後一種心得緣真理^ト兩處ノ真理ハ直^ニ指^ス不二理^ヲ坎如何
 答尋常ノ學者^{マキ}沌^ニ此處^ヲ直^ニ云^ニ不二理^ト被^ル下^ニ云^ニ唯釈四法ノ

論ノ性相^ニ之難^上也 私云真如門ノ理也云^ニ初九種心不

緣真理^ト々々既^ニ真如門ノ理也云^フ後一種心得緣真理^ト

々々忽^ニ不^二理^{ナラン}乎所詮真如ノ理^ヲ說^ケハ成^カ不^二理^ト故^ニ真理^ト

者尚指^ス真如門ノ理^ヲ也如義一々心^ハ直^ニ不^二言^心也例

如^下智度論ノ二重^ニ諦文^ニ云^フ說真諦中有佛有衆生^ト云^中

真諦顯ノ真諦有佛有衆生^ハ密ノ俗諦^トへ加持說ノ義ノ意也問如義

一々心^ハ終^ニ可^レ云^レ非^ニ真如門ノ言^心乎 答不^レ尔不^二言

心如義一々心^ト者三昧經所說ノ第五ノ如義十種ノ心量ノ

第十ノ一々心也所入ノ十名ノ第十ノ真如所入^ハ是^ニ一一

心也是^ヲ云^モ一々心^ト又遣^ニ隨順之疑^ヲ之時本^ニ云^フ雖說無

有能說可說^ト釈論^ニ釈^{セリ}如々々說^ト是^ヲ云^モ如義語^ト也此如

義一々心^ハ真如門ノ言^心也維摩ノ如義^ハ屬^シ顯^ニ屬^{スル}密^ニ古來ノ

二義也若屬^{スル}顯^ニ義^{ナラハ}真如門ノ如義語也若與^ル真如門^ニ之

時^ハ雖^レ云^ト如義語^ト非^ス詮表ノ言語^ニ以^テ無言^ヲ云^フ如義^ト也如^シ維

摩ノ默答^ノ云^モ一々心^ト以^テ無心無念^ヲ云^レ心^ト也如^四楞伽^ニ云^カ無

心之心量我說為^ニ心量^ト是^ヲ約^レ顯宗^ニ無說^ヲ且^ク云^レ說^ト不緣^ヲ

八十二丁右

八十二丁左

又云^ハトモ縁^ト自宗^ハ不^レ許^ニ此義^一若無^ニ詮表^一者不^レ可^レ云^ニ得談真
理^ト若無^ニ縁慮^一者不^レ可^レ云^ニ得緣真理^ト而^ニ真如^ハ言心離絶^ノ
位^{ナルカ}故^ニ得談得緣^ノ重^ハ定^テ可^ニ不^ニナル^一也

一言語心量離不離之義此論明説ノ宗家ノ釈兩門ノ義^ニテ

如何見^レ之乎 答蓮花院ノ義^ニテ別^ニ無^ニ子細^一言心ノ離絶^ハ顯

乘ノ極理言心ノ不離^ハ不^ニ密藏也花遊院ノ義^ニテ有^ニ二義^一

義^ニ云如義一々心^ハ真如ノ言心也故^ニ此ノ言心^ニモ可^レ有^ニ約顯

約密^ノ二義^一今以^ニ言心離不離^一為^ニ顯密^一差異^ト事^ハ約^ニ二約密^一

之邊^ニ也 問如義一々心通^ト顯密^ニ云事甚不^レ可^レ尔若

通^{セハ}於^ニ言心^一不離^{ナル}處^ニ可^レ有^ニ顯密^一真如ノ理^一若尔^ハ何以^ニ離不

離^一為^ニ顯密^一界畔^ト乎 答此難尤難^レ遮^シ花遊院ノ義^ノ大ナル難

問也故^ニ一義^ニ云惣^{シテハ}雖^{トモ}如義一々心通^ト顯密^ニ云^ニ得談真

理得緣真理^ト時^ハ局^レ密^ニ也 問今拳^ニ五種^一言說十種^ノ心

量^ヲ事^ハ為^レ出^ニ真如門^一言心^ヲ一也真如門通^ニ顯密^一故^ニ言心^モ随^テ

乍^レ許^シ通^ニ顯密^一得談真理得緣真理^ノ言心^ハ唯局^レ密^ニ云事

如何若局^ハ密^ニ第五第十ノ言心^ニハ可^レ云^レ不^レ損^ニ顯^一邊^ヲ乎 答

八十二丁右

此條難義也然^{トモ} 舉^ニ 真如^ノ言心^ヲ為^ニ第五第十^ノ言心^ト何於^ニ

八十二丁左

真如^ノ分^ニ有^レ所^レ漏^ス乎然^{トモ} 隱顯互論^ハ聖教^ノ常^ノ習也且^ク隱^ニ約

顯^ノ言心^ヲ付^ニ約密^ノ言心^ニ作^ニ釈^ヲ有^ニ何^ノ相違^ハ乎若不^レ尔者金

剛頂經^ノ開題^ニ以^ニ曼荼四身^ヲ或為^ニ一々心^ノ所緣^ト或云^レ非^ニ

一々心^ノ所緣^ニ取捨^ノ兩邊如何可^ニ意得合^ス乎蓮花院^ノ義^ニ

云一々心之所緣^ト者不二一々心也次非一々心者

真如一々心也^云於^ニ一處相連^ノ文^ニ一々心^ノ言^ヲ忽^ニ取

替事無^ニ其謂^ハ其故^ハ此釈^ハ因^ニ三門^ノ實知實相^ニ有^ニ此釈^一列^{シテ}

三門^ノ實知實相^ノ名^ヲ云^ク三自門^ノ實知實相^一一々心門^ノ實

知實相性德圓滿海^ノ實知實相^云又云不二門實知

實相^文一々心^ノ名^ハ既^ニ指^ス真如門^ヲ何忽^ニ不二^ヲ云^{ハシ}一々心^ト

乎無^レ爭於^ニ真如一々心^ニ有^ニ約顯約密之義^一故^ニ有^ニ取捨^ノ

釈^ニ云事 已上大意畢

又樣

宗家意以^ニ今論^ノ門法^ヲ判^ニスル 顯密^ヲ之時以^ニ真如十六^ノ門法^ヲ

唯可^レ云^レ為^ニ顯教^ト乎 答依^ニ一義^一可^レ尔也 兩方若云^ニ

八十三丁右

唯顯教_一者住心論等ノ中ニ以_二五重ノ問答ヲ證_一住心_一之時以_二三自一心ヲ證_一第九ノ住心_一ヲ可_レ知真如門ハ可_レ撰_二第十二也加之宗家ノ釈ノ中ニ挙_二三密四曼_一畢一々心ノ所縁_文解釈誠

分明也若又云_レ尔者以_二得不撰不撰等ノ文ヲ證_一顯密_一之

時密ハ唯局_二三不二真如ハ偏_レ属_レ顯_一依_レ之大師ノ釈中ニ風水龍

王一法界真如生滅歸此岑_文尔者兩方也

答此事先哲ノ未決也學者爭忽_二弁_二義ノ邪正_一乎雖_レ然

以_二性德縁起_一ヲ為_二顯密ノ差異_一ト真如ハ既_二縁起因分_一ノ々齊何

属_二密乘性德之法門_一乎且ハ一邊_二令_レ玉_一ヲ出得不撰不撰之

決判無_二異論_一乎但至_二五重問答_一者未_レ出_二真如_一何云_レ為

レ密乎次至_二釈文_一者於_二一々心_一有_二因果_一彼ハ不二々心_{ナルカ}

故_二不_レ可_レ有_二相違_一矣

【国訳】《約顯約密》

宗家の意、三十三の法門を以て顯密を判ずるの時、不二を以て密とし、三十二の法門は唯だ顯に局ると云うべしや。

答う、当寺兩門跡の異義なり。¹⁶

若し花遊院の義の意ならば、三十二の中に於いて真如十六の門法には顯密の二義有るべし。是れを約顯約密の義と云うなり。若し蓮花院の義に依らば、三十二は一向に顯に局ると云うべきなり。兩義俱に明ならず。先ず、花遊院の義に付いて、真如は顯密に通ずと云わば、凡そ顯密の差異を思わば緣起性徳を以て其の別とす。而るに、不二は是れ性徳圓滿の根源、三十二は又修行種因海の枝末なり。三十二の法門、若しは真如、若しは生滅、不二より緣起せずということ無し。若し爾らば、真如一向に顯にして密に通ずるの義有るべからず。之に依つて、宗家、第一第五第十の三處の文を引いて顯密の誠証とするの時、密を証すること、唯だ不二に局つて余の法門に通じざるをや。次に、蓮花院の義に付いて又明ならず。宗家、『二教論』の中に真如門の広説段の言語心量離不離の文を引き畢つて、「言語心量離不離の義は此の論に明らかに説けり。顯教の智者、詳かんじて迷を解け¹⁸」と文り。釈の意は、言語心量の不離なるは密、離なるは顯と顯すに非ずや。彼の言語心量とは真如門の言心なりと見えたり。若し爾らば、真如の法門の上に於いて四言九心離絶と見るの辺は顯なり。如義一々心を以て真如の理を緣詮すと見るの辺は密なり。知るべし。真如門は顯密に通ずと云う事を。是れを以て、『金剛頂經』の『開題』に、上に法仏の三密、曼荼の四身を挙げ畢つて、「九種の心量の所縁に非ず。一々心の所縁なり(而已)。又一々心の所縁に非ず。不二心の所証なり、而已¹⁹」と文り。知るべし。「一々心の所縁」とは真如約密の義辺なり。「一々心の所縁に非ず」とは真如約顯の義辺なりと云う事、豈に異論に及ばんや。

答う、先の重には両門跡の異義を出すと雖も、且く相承の伝に任せて真如は唯だ顕に局るの義を存し申すべきなり。遮情の空理に留まるを以て顕とし、表徳の実義を顕すを以て密とする事、顕密の大なる界畔なり。縁起性徳の差異、専ら此の処に在る者なり。而るに真如門を思わば、一相一寂の法門、無相無念の境界なり。是れ則ち、顕乗の極理、遮情無相の分齊に非ずや。是れを以て宗家の釈に第九の住心を判ずるの時、或いは「真如生滅は此の岑に帰す」²⁰と云い、或いは「三種円融の仏、一門の境に優遊す」²¹と判ぜり。是れ等の釈、豈に真如門を以て第九住心と定むるに非ずや。且つは第一巻の性修の判文²²に分明なる者か。但し言語心量離不離の文を引いて顕密の証文とするに至ては、真生不二の三門は元より一法の上の三重の義なり。故に四言九心離絶すと見れば、真如無相の極理なり。此の上に如義一々心を以て彼の位を縁詮すと見れば、即ち表徳の実相にして不二の法門と成るなり。如義一々心の縁詮の境界を以て猶お真如門とすとは意得べからず。次に、『開題』の釈に至ては、第二巻の『論』釈の料簡の如くなり。上に挙ぐる所の法仏の三密、曇荼の四身とは不二の法門なり。表徳の実相なるが故に、下に至て彼を縁ずる心を一々心と云う。是れ不二心なるべきが故に、真如一々心には非ざるなり。次に、一々心の所縁に非ずとは前の一々心に非ず、是れ通妨の釈なり。一々心の所縁と云うを真如一々心かと思ふべし。故に彼を通妨して、真如一々心には非ず、不二一々心と云うなり。凡そ一々心に於いて真如不二の二箇の一々心有るが故に相違有るべからず。

重ねて難じて云わく、凡そ宗家の処々の解釈を開するに、如義語を以て自性法身の所用として、但だ密

を説く言語と定むる事、敢えて以て異論無し。是の故に、『二教論』には「唯だ自性法身のみ有して、如義真実の言を以て能く是の絶離の境界を説きたまう。是れを真言秘教と名づく。謂わく、金剛頂等の経是れなり」と云い、『声字義』²³には真妄二語を以て顕密を判する時、龍猛の五種の言説を以て彼の証文とせり。²⁴而るに、如義語とは真如門の言語なり。若し如義を以て不二の言語と定めば、『今論』の解積分は唯釈四法²⁵の故に、後重の一心の下²⁵の二法二門の分齊なり。彼の真如門を釈するの時、真如離絶の相を明かすを生滅四言の分齊に約して言語離絶の旨を述ぶ。若し自門に約せば、如義語を以て説くべしと云うなり。「非無自門言説及念」²⁶の『論』釈、専ら此の意を顕すなり。若し此の如義語を不二の言語とせば、真如門の広説段は不二の説段にして真如門に非ざるべし。唯釈四法の『論』の主旨に背くに非ずや。其の上、維摩の無言を以て第五の如義語を証すと見えたり。如義若し不二の言説ならば、直ちに表徳の実相を述ぶる言語なり。豈に無言顯理の分齊なるや。定んで知んぬ、第五の如義語に約顕約密の二義有るが故に、或いは自性法身の所用とも判じ、或いは維摩の無言を以て之を証するなり。若し又如義は必ず不二の言説なるが故に顯に通じずと云わば、『本論』に随順の問を答うとして「説くと雖も能説可説有ること無く、念すと雖も亦た能念可念無し」²⁷と文り。此の「雖説」の「説」をば『論』に「如々々説」²⁸と釈せり。如義語に非ずや。若し爾らば、『本論』既に真如随順の言説を出す。何ぞ如義語は真如の言説に非ずや。其の上、言語心量は一雙の法門なり。『論』に第十の一々心をば、『本有経』の「甚深の真諦、余の境界に非ず。唯だ自所依のみ縁じて境界とす」の文を引いて之を証す。若し所立の如くな

らば、「甚深真諦」とは不二を指すか。不二は何なる所依有つてか「唯だ自所依のみ縁じて境界とす」と云うや。設い又、不二を以て所依とすると雖も、不二は三十二の通所依なり。²⁹ 何に簡つてか自所依と云うや。明らかに知んぬ。真如門の理は自門に心念無きが故に、自所依の真如所入、之を縁じて境界とす。³⁰ 生滅所入の他所依に簡つて自所依と云うに非ずや。しかのみならず、宗家の『住心論』の中に、第九に四種の大鏡の文を引いて、第一如実空鏡を「此れ真如門を表す」³²と注し、第二の因熏習鏡をば「此れ生滅門を表す」³³と注し畢つて、「仏花所説の三種世間円融の仏は則ち四種鏡中の第二に当るなり」³⁴と釈す。若し真如門定めて第九住心の所摂とせば、初の二種の鏡、俱に第九に当たるべし。何ぞ「第二に当たるなり」の簡別の釈を設けんや。真如門は約密の義有るが故に、其の義不定なり。治定に付いて、且く「第二に当たるなり」の判釈有りと覺えたり。又先徳、一体一心摩訶衍を釈して、「第九住心の所摂、第十住心の浅略なり」³⁵と判じたまえり。真如門法、第九第十の二箇の住心に亘る事、解釈異論無き者か。但し縁起性徳を以て顕密の差異とすと云うに至ては、元より争い申さざる所なり。真如門に於いては、論主の御意、顕相は顕に約すと雖も、纔かに兼ねて密義を存するが故に、真如一門に於いて縁起性徳の二義を存するなり。「三十二修行種因海」とは顕相に約する一途の判文なり。³⁶ 然れども、論主、此の絶離の境界に於いて、説いて密蔵とするの旨を存するが故に、「言語心量離不離」の判釈有るなり。次に、真如門は一相一寂の法門なりと云うに至ては、元より難者の意、三十三の法門を開立する面は無相至極の位を以て真如門とするが故に、一相一寂の法門なる事をば争い申さざる所なり。而るに、諸教の絶離

するは何に故ぞとならば、諸教は元より随他意の教なるが故に、凡夫の妄情を本として建立する所なり。而るに、漸く不二に入らしめんが為に、諸教の建立を廢して、真実の法体は無相離念の境界と云うの処に密を顯すの意樂有るなり。故に、離絶の境界とするの辺は顯教、顯す所の真如の実体は密の法門なり。此の二分を挟んで真如門と立つるが故に、真如門に於いて顯密の二義有りと云うなり。次に、「真如生滅は此の岑に歸す」の釈に至ては、古来の会通に云わく、真如生滅とは真生二門に非ず。生滅の中の四無為五有為を以て真如生滅と云うなり。故に、所歸の処を「風水龍王一法界」と云う。風水龍王とは生滅所入なり。『論』の第二に³⁷「出生光明龍王」をば真如所入と云い、「出生風水龍王」をば生滅所入と云うが故に、一法界の言も「無尽二法界」³⁸なるべしと云々。設い又、真如生滅は常の真生二門なりと雖も、元より真如門の第九の住心なる事をば強ちに遮し申さざるの上は難と成すべからず。次に、優遊二門境とは又前に准ずべし。次に、真如離絶の位を説けば不二と成ると云う事、其の義又遮せざる所なり。然れども、『論』の第二卷に真如門の広説段に於いて出す所の如義語は真如門の言語と見たる事、分明なり。故に、如義語の所説は猶お真如門にして生滅に非ずと成じ申す所なり。次に、『開題』の釈に至ては、法仏の三密、曼荼の四身即ち真如の体なるが故に、之を縁する一々心も真如所入の心念なるべしと存し申すなり。三密四身を不二に属して真如に通じざるとは共に許し申さざる所なり。次に、上下の一々心、忽ちに相違すと云う事、尤も思い難き所なり。一具相連の文に於いて、一々心の名字豈に相違すべけんや。故に知んぬ。一々心を以て、或いは密に属し、或いは顯に属す。是れ則ち約顯約密の誠証

なり。凡そ一々心とは真如所入の十名の中の第十の「是一是一心」³⁹なり。是れ既に真如所入なる事、異論無きの上は、十種の心量の中の第十の一々心、何ぞ忽ちに相違して不二心を出でんや。

答う、三十三の法門の縁起を思わば、不二は性徳の根源、諸法の自位に住するの位なり。而るに、機のために施設する時、無相離念の機の為に両重八種の真如門を開く。之が所依たるの位を真如所入と名づく。故に、真如門法を、或いは「縁起因分」と云い、或いは「有機有教」と云うなり。若し爾らば、逗機施設の真如門の中に性徳円満の密を含説すと云う事、大いに立教の主旨を背する者か。なканずく、約密の真如は不二に非ずして、猶お真如と云うべきか。將た又、不二を以て真如の中に含説するか。若し約密なりと雖も猶お真如門の分齊なりと云わば、三十三の法数増して四十九の法門と成るべし。約密の真如の十六の数を増すべきが故に、真如と云うと雖も其の体顕密に分ちて一種と云うべからず。故に、若し不二を含説すと云わば、約密の辺は即ち不二なり。何ぞ真如に於いて約顕約密の二義有るや。又、約密の真如は「機根有るが故に教説有るが故に」と云うに於いて、三十二の法門の中に之を存するか。若し爾らば、同じく密の法門なるに、何ぞ不二を「機根を離れたるが故に教説を離れたるが故に」と云⁴⁰い、真如の約密を「有機有教」と判ずるや。不二の「離機根」、既に顕機を遮するの詞なり。真如の「有機根」は定めて顕機を指すの詞なるべし。文句の相対分明なるが故に。若し爾らば、顕機の及ぶ所の真門、争か密を存すべけんや。若し又、彼の『論』釈は且く約顕の真如に付いて彼の釈を作すと云わば爾らず。彼の問答は立義所立の三十三の法門に於いて不二と三十二との界畔を問答するなり。立義所立の

真如門の分齊、漏るる所有るべからず。立義分の真如門に密を存せずんば、彼を釈する解積分に至て何ぞ忽ちに密を損せんや。⁴¹ 旁た以て思い難し。宗家、『論』釈を引いて顕密の誠証に備えたまう文四処なり。一には一卷の得不の文、二には真如門の広説段の言心離不離の文、三には五卷の五重問答の文、四には第十卷の性海因海損不損の文なり。而るに、三処の文は不二を以て密とし、三十二を以て顕とす。何ぞ真如の広説段に局つて忽ちに縁起因分たるの真如を以て密として顕密の誠証に備うるや。一師の解釈に於いては、銚楯を成すべからざる道理の至極なり。是れを以て、宗家は「能損大乘とは不大大乗なり。所損大乘とは二重三十二の大乘なり」⁴²と釈し、先徳は「不二は真如常住なり。三十二は生滅無常なり」⁴³と判じたまえる。宗家先徳の釈の中に顕密を判ずるの時、不二を以て密とし、三十二を以て顕とする事、眼に溢れ、耳に満つるを、何の処にか分明に真如を以て密とする判文有るや。真如門の広説段の顕文に拘つて立教の大経を忘るるに似たり。但し如義語は真如門の言語なりと云うに至ては、馬鳴は顕の祖師なるが故に諸教絶離の境界を以て真如門とす。龍樹は密を伝うる元祖なるが故に諸教の絶離は密蔵の本分なる事を顕さんが為に、因みに絶離の境界を説くの言語を出すなり。彼の絶離の境界とは即ち不二摩訶衍なるが故に、之を説く言語は即ち不二の言語なり。故に『本論』は離言離心の重に留めて可言可念の説念を出さず。『釈論』は分明に既に離言離心とは四言九心に約する談なりと判じて、若し如義一々心に約さば、此の絶離に於いて可言可念の説念有るべしと云わば、彼の説念の境界は真如の重に非ず。直ちに不二なるが故に不二の言心と成るなり。設い真如門の説段なりと雖も、便に因つて密意を

顕すは『今論』の通例なり。彼の五重問答の如き生滅門の四法熏生の中の白品相熏門の問答なりと雖も、
 前重不二の問答に及ぶ。⁴⁶況や又、真如門は絶離の境界に因つて離絶の分齊を判ずるの時、可説可念の言
 心を出すべきの条、説文の次第其の次無きに非ず。何ぞ強ちに真門の説段に不二を交わんと言ふ難を致
 さんや。次に、『本論』の中に真如門に於いて説念を出すと云うに至ては、彼の説念をば、『論』に能所
 無しと判じたまえり。故に『論』に云わく、「能説可説無き如如如説なり」⁴⁷と文り。是れ則ち無言を以
 て如義と云ふなり。若し言説有らば、何ぞ能説可説無からんや。三師の解釈は此の意なり。凡そ真如門
 は無相絶離の法門なるが故に、無言を以て言説とし、無念を以て心念とす。如義語の説と云えども、亦
 く不説の義を示すなり。宗家の意は爾らず。言語心量の離不離を以て顕密の誠証とする事は、離不離大
 いに各別にして其の誠証と成るべきなり。但し如義を以て不二の言語とせば、真如門の広説段、不二の
 説段なるべしと云うに至ては、其の理先立つて顕し畢んぬ。真如門の広説段とは三離の相を示すなり。
 彼の三離の説に因つて不二の説念を出すを以て、何ぞ強ちに不二の説段なるべしと責めんや。「因便」
 の釈を設くるは聖教の常の習なり。難端頗る一隅に拘り、作釈の巧妙を忘るるに似たり。次に、『維摩』
 の如義を以て第五の如義を証すと云うに至ては、之に付いて二義有り。⁴⁸一には、第五の如義の証に非ず。
 第五の如義をば『三昧経』を以て之を証し、『維摩経』は『本論』の「因言遺言」を証するが為に引く
 所なり。『本論』の「因言」の言をば「如々々説」と釈すと雖も、『本論』は顕論なるが故に無言の如義
 なるべきなり。故に、浄名の無言を以て之を証す。『三昧経』の「我所説とは義語にして文に非ず」⁴⁹と

云うには同ぜず。一には、自宗の意は浄名大士を以て西方の語菩薩と習うが故に、無言とは且く顕機聴を隔てるの辺なり。実には不二の法を説くが故に、文殊讚印して「如言をもつて如を説きて、如の耳に如を聴かしむへ乃至」其れ乃ち真実の不二法門なり、其れ乃ち真実の不二法体なり⁵¹と云う。如義の所説は不二なる事、還て此の文を以て良証とするべし。次に、『本論』に如義有りと云うに至ては、顕人、密を知らざるの義辺にて四言の上に且く如義の名を与うるなり。五種の言説相對して真妄二語を分別せんの時、真語に属すべからざるが故に。彼の『宗輪論』に、「諸仏の説法、如義に非ざること無し⁵²」と云うが如くは、設い生滅門の法門なりとも如義の説と云うの義有り。然れども、今の第五の如義には非ず。若し爾らば、如義と云うには依るべからず。次に、『本有経』の文に至ては、凡そ不二は諸乗の根本無尽莊嚴の本位なり。故に、三乗一乗の諸乗は皆な一切智智無量乗の浅略の義門なり。故に、真如の所依たるは真如の秘密趣なり、生滅の所依たるは生滅の秘密趣なり。真言の無量乗に一々に之を具う。十住心に於いて各の顕略趣秘密趣有るが如し。故に知んぬ。顕の無相の真如門は心念離絶の境界なるが故に、顕に於いては之を縁ずる心念無し。自心所依の秘密趣に三密を具足せり。彼の意密を以て之を縁ずる時、無相の境界は秘密趣の法門と成るなり。故に「唯だ自所依のみ縁じて境界とす」と云う。不二と云うを以て差別の相無く一味の法とは云うべからず。縁起因分の法門は皆な各の性徳の根源より流演する所の浅略の義門なるが故に、各の深秘の所依有るべきなり。但し此の段は愚推の一義なり。或は又、自所依の言は未だ必ずしも所依に於いて自他有りと云わず。能依の真如門を他の生滅に簡つて自と云う

許りなり。⁵⁴ 古来会通斯の如し。次に、甚深真諦は不二を指すと云うに至ては、先ず甚深真諦と呼ぶるの法は真如門なり。自所依の所縁と成るの時是不二なり。所詮、一法の上に真妄の二分有り。妄は生滅門、彼を遮するは真如門、妄を遮して顯す所の実体は不二なり。但し「第二に当たるなり」の釈に至ては、彼の釈の末に「次に二種の鏡は（中略）此の住心に於いては無用なるが故に」⁵⁵と文り。此の釈の顯す所の「初二種鏡」は此の住心の所用なりと聞こえたり。第一鏡に若し無用ならば、何ぞ必ずしも「次二種鏡無用」と云わんや。還つて答者の潤なる者か。但し「三種世間円融の仏は第二に当たるなり」と云うが故に、第二鏡の三種世間熏習一覺の義、殊に第九の住心に順ずるが故に、此の一边の義を以て「第二に当たる」と釈するなり。凡そ真生二門を以て花嚴一宗に配するの時、真如門は果性不可説の重に当たり、生滅門は因分可説の重に当たるべし。三種世間熏習一覺は因分可説の法門なるが故に「第二に当たる」と釈したまうなり。此の上に果性不可説の重有らば、真如門は何れの法門ぞや。⁵⁶次に、先徳の釈に至ては、彼の具なる釈に云わく、「問う、前重の一心法界、十住心の中の何の所摂なるや。答う、二義有り。一には第九住心の所摂なり。二には第十住心の浅略なり」⁵⁷と文り。此の釈は未だ必ずしも一体一心を指さず。一心三大相望して一心を以て、為第九（住）心、第十住心の浅略と判じたまへり。⁵⁸是れ則ち、三十三の法門に於いて顕密の廢立重々なる中に、一心を密とし、三大義を顯とするの義門なり。彼の一心には真生二門を摂するが故に、未だ必ずしも真如門を密とせざるなり。故に一心法界を一体一心と定むべからざるなり。故に、花嚴と三十二とに於いて同異を判ずるの時、同じく無明の分位なるが故に、

同じく応化仏の所説等と云々。若し真如門、密に通ぜば何ぞ一向に無明の分位と定め、応化仏の所説と云うや。所詮の義門不定なるが故に、一辺の義を以て難勢とすべからず。一処には三十二の法門に後重の四法惣を加えて三十七尊の三摩地と判じたまえり。⁵⁹此の釈に依らば、生滅門に於いて約顯約密の義有りと言ふべしや。

一、先徳の指事に花嚴と三十二と同異の釈の事。

問う、真如若し一向に顯に局らば、三十二と花嚴と異の義有るべからず。其の上、異に於いて七種を出す中に多分は真如を以て花嚴に別すと見えたり。知んぬ、真如は密に通ずるが故に、花嚴に異なるなり
（と言わんとぞ）。

答う、法門の分齊に約さば、三十二の法門、花嚴に勝るるの分有るべからず。然れども、『今論』は権実の中間に居して顯密の兩際を兼ねるが故に、密を知るを以て三十二の花嚴に勝るるの分とするなり。故に、七異の随一に云わく、「彼は後の住心を知らず、此れは後の住心を知る」⁶⁰と云々とは此の意なり。若し異の時は真如を以て密とすると云わば、何ぞ後の住心有りと云うや。而るに、三十二の分齊は未だ第十の住心に及ばざるが故に、「後の住心を知らず」と云うなり。之を以て余の異を推するに、皆な後の住心を知る分齊なるべし。又、「彼は但だ淺略無明の分位、此れは淺深明無明に通ず」⁶¹と云々。無明とは五重の問答なり。彼は不二を以て明とし、全く真如を以て明とせず。知るべし。明に通ずと云うを以て真如を花嚴に異なると云うべからず。故に知んぬ。『今論』の三十二は不二有ることを知るが故に

花嚴に異なるなりへと言わんとぞ。

一、問う、約密の真如とは其の体何物ぞや。

答う、古来の義に云わく、淨菩提心の遮情の無相なり。得談真理と云えばとて、真如門の広説段に異なるの説に非ず。唯だ真如門の広説段は顯教の極理、無相の境界なるが故に、四言九心絶離す。花嚴の果性不可説の如くなり。約密の真如とは、法身如来、如義語を以て淨菩提心の上の遮情無相の法門を説くなり。無相の義等しきが故に、真如門と名づけれども、顯に約すれば無相の極理は盲言及ばざるが故に離言と云う。密に約すれば無相の境界を淨菩提心遮情の義なりと説くが故に、「後の一言説は真理を談ずることを得る」⁶³と云うなり。一義に云わくへ私へ、約密の真如は密の表徳なり。其の故は約顯約密の義の起りは『金剛頂經』の『開題』の釈なり。一々心を以て一度は密を縁ずると云い、一度は密を縁ぜずと云うが故に。而るに彼の所縁の密とは法仏の三密、曼荼の四身なり。三密四曼の体、豈に表徳に非ずや。其の上、顯に約して不説と云い、密に約して得談と云うは、『二教論』の「是の如きの絶離は並びに因位に約して果人を謂うには非ざるなり」⁶⁴の釈に当たれり。彼の重をば『二教論』に「謂わく、因位の人は四種の言語皆な及ぶこと能わず。唯だ自性法身のみ有して、如義真實の言を以て能く是の絶離の境界を説きたまう。是を真言秘教と名づく。金剛頂等の經是れなり」⁶⁵と云々。「四種の言語は皆な及ぶこと能わず」をば、『論』には「前の四言説は虚妄の説なるが故に真を談ずること能わず」⁶⁶と云う。「唯だ自性法身のみ有して、如義真實の言を以て能く是の絶離の境界を説きたまう」をば、『論』には「後

の一言説は真理を談ずることを得る」と云うなり。『金剛頂』等の説、豈に表徳の法門に非ずや。又顯密二教の界畔は源と遮情表徳の二重に在り。而るに、言語心量の離不離を以て顯密の差異とするの意は、言語心量の離は顯、不離は密と云うに非ずや。若し爾らば、不離の位は表徳を顯すべしの法門なるべし。問う、爾らば約密の真如と不二と如何が別なるや。

答う、此れに二義有り。⁶⁷一には真如は浅略、不二は深秘なり。一に云わくへ私へ、不二と云う時も密の法門を尽くし、真如の約密も又密の法門を尽くすが故に、法門の分齊は同なり。然れども、真如と立てるの時、諸教の絶離は密蔵の本分なる事を顯さんが為に、真如の処に密の意を含説するの意有り。彼の所含の密を顯して「後の一言説は真理を談ずることを得る」と云うが故に、強ちに密の浅略には局るべからざるなり。

問う、爾らば、約密の真如も其の体、不二に当たれり。諸教の絶離を説けば密蔵と成る。其の密蔵とは不二なり。爾らば、蓮花院の義も又爾なり。何ぞ強ちに真如の約密と云うや。

答う、蓮花院の義は、四言九心の絶離する位を説けば密蔵の不二と成ずるなり。花遊院の義は爾らず。四言九心の絶離の真如の処に密意を存するが故に、猶お真如の摂属とす。其の体は不二なりと雖も、真如に含説せらるるが故に、猶お真如と云うなり。是れ只だ教相の建立なり。法体に差異有るに非ず。若し法体に約すれば、只だ不二と真如と生滅との三重なり。⁶⁸約密の真如は、若しは不二の外に別体を存する四重なるべし。夫れ豈に爾らんや。

問う、爾らば、『本論』の真如も密を含説するか。設い密を説けども唯釈四法の『論』釈に違せずと云うが故に。

答う、是れ又二義有り。⁶⁹ 一には『本論』の真如は唯だ顕なり。『釈論』は此の真如に於いて説けば密蔵と成ると釈するが故に、真如に密を含せしむ。諸教の絶離を密蔵の本分と云うの時、諸教の絶離とは顕教の極理なるが故に顕に局れども、密の眼より之を見れば密蔵の本分と見成すなり。一には『本論』も内鑑冷然の故に、密を知らざるに非ず。故に、真如の顕相は顕に約すも、密意は密義を挟むなり。龍樹、此の密意を探出して密の言心を挙ぐるなり。

一、問う、真如門を以て花嚴とするの時は果性不可説の重とすとは花嚴宗の意に背するか。彼の宗は真如門を以て頓教の分齊と定む。是れ三乗教の極理なり。未だ一乗に及ばず。如何。

答う、清涼、天台に四教を立て、花嚴に五教を立てる事を釈さんとして、「天台に立てざる所以は四教の中に皆な一絶言有るを以てなり。今乃ち開くことは、別の一類離念の機の為の故に、即ち禪宗に順ず⁷⁰」と文り。此の真如門の絶言無相の理を以て天台は四教各々の極理とするが故に、円教の極理も此の真如門なるの義有り。又、真如門を以て禪宗に配す。而るに、宗密の釈に禪門をば或いは頓教の分齊とし、或いは円教の極理とすと云々。故に知んぬ。宗家の御意、惣ずれば諸教の絶離、別しては花嚴の極理とす。故に、花嚴に摂するの時は果性不可説の重とするなり。別して一類離念の機の為に真如門と立てるの辺をば取らざるか。

此の論義の大意は、真如門の広説段に体真如の理の離絶の相を明かさんとして、「言説の相を離れ（乃至心縁の相を離れ）」と文り。『論』に五種言説と十種の心量とを出さんとして離言離心とは四言と九心とに約す。如義と一々心とに約すれば、真体を説くと言説も有り。真体を縁するの心量も有りと云々。此の如義語一々心を花遊院の義にては直ちに真如門の言語心量なりと思えり。其の故は、『今論』の解釈分は唯釈四法なるが故に、所釈は真生二門の分齊を出すべからず。故に知んぬ。如義語一々心は真如門の言心なりと云う事を。而るに、宗家、如義一々心の縁詮する所の法門をば密藏と判じたまえり。「言語心量離不離の義は此の論に明らかに説けり。顕教の智者、詳じて迷を解け」の指勸の文、言心の離不離を以て顕密の界畔とす。故に知んぬ。如義一々心の縁詮は秘密の義なりと云う事を。若し爾らば、真如の理を以て密とすべきなり。しかのみならず、『金剛頂經』の『開題』に初には、「法仏の三密は四種の言語も説かず。曼荼の四身は九種の心量も縁ぜず」⁷³と云う。此の釈既に『釈論』の「前の四言、真を談ずること能わず。初の九種の心、真理を縁ぜず」⁷⁴の文を雁せり。体真如の理を以て法仏の三密、曼荼の四身とするの条分明なり。又、下に至ては、「九種心量の所縁に非ず、一々心の所縁なり（是れは真如の約密の義なり）」。一々心の所縁に非ず、不二心の所証なり、而已（是れ則ち真如の約顕の義なり）⁷⁶と文り。一々心を以て所遮とするなり。

問う、真如門に於いて約顕約密の義有りとは、顕密の理其の体同なるか。将た又、顕密の二種の理を合して真如門を立てるか。又、約密の真如は直ちに不二の理なるか。如何。

答う、此の事、花遊院の義の古来の難義なり。⁷⁷一義に云わく、無相寂滅を以て真如門の理と定む。而る上は此の寂滅の理を置いて顕とも密とも見るべきなり。密と見るの時は初地の遮情の法門なり。非青非黄等の初地の遮情をば第八の住心の説文とす。故に知んぬ。一種の理を以て顕密に通ずと云うべきなり。故に約密の真如は不二の理には非ざるなり。

問う、爾らば、『開題』の「法仏の三密は四種の言語も及ばざる」等の釈、如何。三密四曼豈に遮情の法門なりと云うや。

答う、遮情とは元より表徳の上の情計を遮するの法門なり。故に、三密四曼の法体の上に於いて不説不縁と見れば遮情なり。得談得縁も不説不縁の処を縁詮すと云うが故に、猶お遮情の分なり。一義に云わく、真如門に於いて約顕約密の義有る事は、諸教の絶離は密蔵の本分と云うと同重の法門なり。諸教の絶離は約顕の真如なり。密蔵の本分は約密の真如なり。此の義にては、約密の真如は表徳の体なり。『開題』に「如来の奥地は廢詮照潤の心地に闢き、仏樹王の芽は言亡慮絶の空性に生ず⁷⁸」と云々。是れ則ち諸教の絶離を密蔵の本分とする釈なり。既に或いは「如来奥地」と云い、或いは「仏樹王芽」と云う。豈に遮情無相の空理の分齊ならんや。故に知んぬ。顕の遮情の理と密の表徳の理とを合して一種の真如門を立てるなり。

問う、此の義ならば、約密は表徳の理なり。直ちに不二の理を指すに非ずや。

答う、表徳の理に於いて浅略深秘の二重有るべし。不二は深秘の重、約密の真如は浅略の重なり。次に、

蓮花院の義の意は、三十三の法門の縁起を思うに、不二は諸法の本位に居する性徳円満の位なり。真如門と不二の法門とは機の所知に非ざるが故に、⁷⁹無相の名相を立てて施設仮立する位なり。仮立施設の法門を以て密とすべからず。故に真如は唯だ顕に局るなり。故に宗家、『論』の第一第五第十の文を引いて顕密の優劣浅深を判するの時、密藏は唯だ不二に局ると見えたり。且く縁起性徳を以て顕密の差異とす。真如門を以て性徳の法門とするの義有るべからず。但し、此の義の難義は、如義一々心を以て密の言心とすると、『教王經』の『開題』に一々心を以て秘密の能縁の心とするとなり。先ず真如門の広説段の如義一々心は真如の言心には非ず、直ちに不二の言心なり。其の故は凡そ真生不二の三重の法門は、先ず応化仏、凡夫の謂情に任せて随他意語を以て施設安立する所の諸の法門は生滅門なり。此の施設する所の法門は仏内証智の境界に非ざるが故に、悉く之を遮遣して未だ表徳の理をば顕さざる位の一相一寂無相の重を離言離心と云う。此の位を真如門とするが故に、真如の理は他の生滅の四言九心をば絶離して未だ如義一々心の縁詮に及ばざるの重なり。故に、『本論』に体真如の理を説いて「言説の相を離れ、心縁の相を離れ」⁸⁰等と云うなり。然れども、此の絶離は機情を遮するの法門なり。超情の境界は万像歴然たり。是れを性徳輪円の法門と云い、又無尽莊嚴藏と云うなり。此の位を不二摩訶衍と云うが故に、真如門の広説段は真如の離絶を明かすに因つて此の位を説く。不二は密藏と成るの義を示さんとして如義一々心を出すなり。是れ則ち、『本論』は顕論なるが故に離言離心の位に当たるとは即ち諸教の絶離なり。『釈論』は密を兼ねるが故に、諸教の絶離を説いて密藏の本分とするの義を顕さんが為に、更に如義一々

心を加えて之を縁註すと云うなり。言語心量の離不離を以て顕密の差異とすると、不二を密とし三十二を顕とすると、同じ通りの法門なり。

問う、爾らば、「後の一言説は真理を談ずることを得」⁸¹「後の一種の心は真理を縁ずることを得」⁸²と云う
両処の真理は直ちに不二の理を指すか。如何。

答う、尋常の学者、此の処を沌らかして直ちに不二の理と云うを唯釈四法の『論』の性相に背くと云うの難を被るなり。私に云わく、真如門の理なり。「初の九種の心、真理を縁ぜず」⁸³と云う真理、既に真如門の理なり。「後の一種の心は真理を縁ずることを得」と云う真理、忽ちに不二の理ならんや。所詮の真如の理を説けば、不二の理と成るが故に、真理とは尚お真如門の理を指すなり。如義一々心は直ちに不二の言心なり。例えば、『智度論』の二重二諦の文に、⁸⁴真諦の中に仏有り衆生有りと説くと云うを、真諦の顕の真諦の有仏有衆生は密の俗諦と云うが如し（加持説の義の意なり）⁸⁵。

問う、如義一々心は終に真如門の言心に非ずと云うべしや。

答う、爾らず。不二の言心なり。如義一々心とは『三昧經』所説の第五の如義、十種の心量の第十の一々心なり。所入の十名の第十の真如所入は是れ一一一心なり。是れをも一々心と云う。又随順の疑を遣すの時、本に「説くと雖も能説可説有ること無し」⁸⁶と云うを『釈論』には「如々々説」と釈せり。是れをも如義語と云うなり。此の如義一々心は真如門の言心なり。『維摩』の如義は顕に属し、密に属する古来の二義なり。若し顕に属する義ならば真如門の如義語なり。若し真如門に与するの時は如義語と云

うと雖も詮表の言語に非ず。無言を以て如義と云うなり。維摩の黙答の如し。一々心と云うも、無心無念を以て心と云うなり。『楞伽』に「無心の心量、我説きて心量とす」⁸⁷と云うが如し。是れを顕宗に約すれば、無説を且く説と云い、不縁を又縁と云えども、自宗は此の義を許さず。若し詮表無ければ、「真理を談ずることを得」と云うべからず。若し縁慮無ければ、「真理を縁ずることを得」と云うべからず。而るに、真如は言心離絶の位なるが故に得談得縁の重は定んで不二なるべきなり。

一、「言語心量離不離の義、此の論に明らかに説けり」の宗家の釈、両門の義にて如何が之を見んや。

答う、蓮花院の義にて別に子細なし。言心の離絶は顕乗の極理、言心の不離は不二の密藏なり。花遊院の義にて二義有⁸⁸り。一義に云わく、如義一々心は真如の言心なり。故に、此の言心にも約顕約密の二義有るべし。今言心離不離を以て顕密の差異とする事は約密の辺に約するなり。

問う、如義一々心、顕密に通ずと云う事、甚だ爾るべからず。若し通ぜば、言心の不離なる処に於いて顕密の真如の理有るべし。若し爾らば、何ぞ離不離を以て顕密の界畔とせんや。

答う、此の難、尤も遮し難し。花遊院の義の大なる難問なり。故に一義に云わく、惣じては如義一々心、顕密に通ずと雖も「得談真理得縁真理」と云う時は密に局るなり。

問う、今、五種の言説、十種の心量を挙げる事は真如門の言心を出さんが為なり。真如門、顕密に通ずるが故に、言心も随つて顕密に通ずと許し乍ら、「得談真理得縁真理」の言心は唯だ密に局ると云う事如何。若し密に局れば、第五第十の言心には顕の辺を摂さずと云うべしや。

答う、此の条難義なり。然れども、真如の言心を挙げんとして第五第十の言心とするは何ぞ真如の分に於いて漏らす所有らんや。然れども隠顕互論は聖教の常の習なり。且く約顕の言心を隠して約密の言心に付いて釈を作すに何の相違か有らんや。若し爾らずんば『金剛頂經』の『開題』⁸⁹に曼荼四身を以て、或いは一々心の所縁とし、或いは一々心の所縁に非ずと云う。取捨の両辺、如何が意得合すべしや。蓮花院の義に云わく、一々心の所縁とは不二々心なり。次の非一々心とは真如一々心なりと云々。一処相連の文に於いて、一々心の言を忽ちに取替する事、其の謂無し。其の故は、此の釈は三門の実知実相に因つて此の釈有り。三門の実知実相の名を列して云わく、「三自門の実知実相、一々心門の実知実相、性徳円満海の実知実相」⁹⁰と云々。又云わく、「不二門の実知実相」⁹¹と文り。一々心の名は既に真如門を指す。何ぞ忽ちに不二を一々心と云わんや。争無し。真如一々心に於いて、約顕約密の義有るが故に取捨の釈有りと云う事を。已上、大意畢んぬ。

又様

宗家の意、『今論』の門法を以て顕密を判ずるの時、真如十六の門法を以て唯だ顕教とすと云うべしや。答う、一義に依らば爾るべきなり。

両方なり。若し唯だ顕教と云わば、『住心論』等の中に五重の問答を以て住心を証するの時、三自一心を以て第九の住心を証す。知るべし。真如門は第十に摂すべきなり。しかのみならず、宗家の釈の中に三密四曼を挙げ畢つて「一々心の所縁」と文り。解釈誠に分明なり。若し又爾りと云わば、得不摂不摂

等の文を以て顕密を証するの時、密は唯だ不二に局って真如は偏に顕に属す。之に依って、大師の釈の中に「風水龍王は一法界なり。真如生滅此の岑に帰す」⁹²と文り。爾らば兩方なり。

答う、此の事、先哲の未決なり。学者の争、忽ちに二義の邪正を弁ぜんや。然りと雖も、性徳縁起を以て顕密の差異とす。真如は既に縁起因分の分齊なり。何んが密乗性徳の法門に属さんや。且くは一辺に出しめたまう。得不損不摂の決判異論無きや。但し五重問答に至ては、未だ真如を出さず。何ぞ密とすると云うや。次に釈文に至ては一々心に於いて因果有り。⁹³彼は不二々心なるが故に相違有るべからず。

註

6 「諦」について、版本は「體」であるが、運敵の「印本に體を諦と作る書誤なり」との指摘により「諦」に改めた。『大正藏』では「理」であり、脚注には「體」とある。

7 「第九」について、運敵は「第九の二字は傍附なり」と指摘する。

8 「纔」について、版本は「竊」であるが、文脈から「纔」と改めた。

9 「本」について、版本は「未」であるが、運敵の「印本に本を未とするは書誤なり」との指摘により改めた。

10 「是一是一心」について、版本は「是一一一一心」であるが、『釈論』は「是一是一一心」であり、運敵も「是一是一心」と引くため改めた。

11 「四十九」について、版本は「三十九」であるが、運敵は「印本には誤って三十九に作る」と指摘し、「四十九」に訂正しており、それに従った。

12 「白」について、版本は「自」であるが、運敵は「白（白品相熏門）」と訂正しており、『大正藏』の『釈論』も「白」であ

るため改めた。

13 「有」について、『釈論』には「有」の字がなく、運敵も削除している。

14 版本は「印」であるが、「仰」の誤りか。

15 運敵は「住」の字が脱字であることを指摘する。

16 華遊院会慶と蓮華院俊晴の義。両者は大伝法院の学頭を務める。

17 『釈論』卷一（『大正蔵』三三、六〇二下）、『釈論』卷五（『大正蔵』三三、六三七中）、『釈論』卷十（『大正蔵』三三、六六八上）。

18 『二教論』卷上（『弘大全』第一輯、四九〇頁）。

19 『金剛頂経開題』（『弘大全』第一輯、七〇二頁）。

20 『秘蔵宝鑰』卷下（『弘大全』第一輯、四六二頁）。

21 『十住心論』卷九（『弘大全』第一輯、三八九頁）。

22 「性修」とは先に引用した『釈論』卷一の「性徳円満海」と「修行種因海」を指す。運敵は「今此の文を証する意は、不二を性徳円満海とし、三十二を修行種因海とするが故なり」と注釈する。

23 『二教論』卷上（『弘大全』第一輯、四八五頁）。

24 『声字義』（『弘大全』第一輯、五二六頁）。

25 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇二頁中）。

26 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇七頁中）。

27 『起信論』（『大正蔵』三三、五七六頁上）。

28 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇七頁中）。

29 『記』（『呂統』七三、八頁右上）「摩訶衍法雖唯等とは謂わく、不二の法は而も三十二種の恒沙の法門の爲の体性なり。是れ衆乗の通所依なるを以ての故に」。

30 運敵は「真如門の理とは即ち是れ真門所証の真如なり。自門とは即ち能入門なり。自所依とは所入の本法、所謂る第十の
一々識心なり。意の云わく、門には之を縁する心念無きが故に、所入の一々心、之を縁じて境界とす」と注釈し、「或が問う、
論に非無自門言説及念等と云う。何ぞ自門に心念無しと云うや。答う、所入の一々心を取って且く能入門に属して非無自門
等と云うなり。委曲は自門心念の題の下の如し」と問答を挙げ、「此れは約顯の義なり。若し約密の義ならば、所依の一々心、
自門の真理を縁じて境界とするときは則ち三密四曼の表徳実相を照らすなり」と述べる。

31 『十住心論』（『弘大全』第一輯、三九〇頁）。

32 『十住心論』（『弘大全』第一輯、三九一頁）。

33 『十住心論』（『弘大全』第一輯、三九二頁）。原文は「此れ三自門の法を表す」。

34 『十住心論』（『弘大全』第一輯、三九〇頁）。

35 『釈論指事』（『興大全』上、九五頁）。運敵はこれについて、「或が問う、指事には一心法界と云うは是れ二法二門の総名なり。
一体一心摩訶衍とは二法の中の真如所入なり。今何ぞ指事の文を改めて一体一心摩訶衍と云うぞや。答う、取意して真如所
入を挙ぐることは、真如は第九第十に通ずることを顯さんが為なり。然れども、文、真如所入には局らず。所以に重答に至
て之を会して、此の釈は未だ必ずしも一体一心をば指さずと云うなり」との議論を示す。

36 運敵は「意の云わく、真如、密に通ぜば、一混して種因海と云うべからず。約顯の顯相に約して之を判ず」と注釈する。

37 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇三頁中）。「三には名づけて出生龍王とす。此の中に二有り。云何が二とす。一には出生光明龍
王（真如所入）、二には出生風水龍王（生滅所入）なり。第一の龍王は淨光の明を以て而も依止とし、第二の龍王は風水の
徳を以て而も依止とす」。※へ内は運敵の割注。

38 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇三頁下）。「七には名づけて一法界とす。此の中に二有り。一には純白一法界（真如所入の名）、
二には無尽一法界（生滅所入の名）なり」。※へ内は運敵の割注。

39 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇三頁下）。「十には名づけて一心とす。此の中に二有り。云何が二とす。一には是一一心、

二にはは一切是一一心なり」。

40 運敵は「或が問う、此の難、華遊院の義にて如何んが之を会せんや。答う、会して曰わく、真如を有機有教と云うの時は且く約密の辺を隠すなり。是れ隠顕互論は法門の常式なり。約密の辺は含説なる故なり」と釈する。

41 運敵は「真如の広説は解積分に有るが故に、此の難有るなり」と釈する。

42 『金剛頂經開題』（『弘大全』第一輯、七〇二頁）。

43 『釈論指事』（『興大全』上、九二頁）。

44 運敵は「或が問う、此れに傾疑有り。前には一一心の所縁に非ずとは真如門の一一心なりと言い、今は一一心とは不二の心なり。便に因つて之を出すと言う。如義語も亦た之に同ずべし。前後相違するに非ずや。答う、龍樹は便に因つて不二の心を出したまう。然れども、機根に遂つて自ら二種と成る。謂わく、顕人は之を取つて無心の心量と為るが故に一心に二有りと云う。所謂る真如の一一心、不二の一一心なり。宗家は之に順するか。故に一一心の所縁に非ずと云うなり。如義語も亦た之に同じ。維摩の如義、顕密に通ずるは此の義なり」と問答を挙げる。

45 運敵は「按ずるに、四法熏習を釈する中に五門有り。其の第四は分割散説門なり。此の門の中に亦た四門有り。一には黒品相重有力門、二には白品相重有力門、三には發起問答決疑門、四には拳縁広説開通門なり。五重の問答は發起問答決疑門の中に有り。白品相重門と云えるは諸記の失ならん」と指摘する。

46 運敵は「前重不二の問答に及べりとは五重の中の三百一心摩訶衍法とは是れ前重の生滅所入なり」と釈する。

47 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇七頁中）。

48 運敵は「此の二義、後の義を正とす。此より下地に至て異義多端なり。論議迷い易し。須らく正義を用いて余の義を廃すべきなり」と釈する。

49 『金剛三昧經』（『大正蔵』九、三七一頁上）。

50 運敵は「或が問う、此の釈処何や。答う、此れ相伝の習なり。釈処を尋ぬべからず」と釈する。

51 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇六頁下）。

52 運敵は「宗輪論、具題には異部宗輪論と云う」と述べ、『異部宗輪論』の引用であるとするが、『異部宗輪論』には当該箇所がなく、『部執異論』（『大正蔵』四九二〇頁中）に引かれる。「如来は一音に能く一切の法を説きたまう。如来の語は如義に非ざることを無し」。

53 運敵は「此れ本有経の甚深真体非余境界唯自所依縁為境界の文を会す。意の云わく、不二は諸乗の所依の秘密趣たり。故に真如の所依の秘密趣は即ち不二密藏なり。又、生滅所依の秘密趣は即ち不二密藏なり。所以に不二を指して自所依と云う。此の義は自の言は不二の自体即ち諸法の所依たるなり」と釈する。

54 運敵は「意の云わく、所依の秘密に自他有りと謂うには非ず。真如門に於いて自所依と云うは真如の所依の不二密藏なり。生滅門の他に簡うが故に」と釈する。

55 『十住心論』（『弘大全』第一輯、三九二頁）。※（中略）は筆者の加筆。

56 運敵は「意の言わく、真如門若し果性不可説の重に非ずんば、花嚴一宗に於いて何れの法門とせんや」と釈する。

57 『釈論指事』（『興大全』上、九五頁）。

58 運敵は「一心を以て、判じて第九の住心、第十の住心の浅略としたまえり」と書き下す。そして、「意の云わく、一には、一心を以て第九の住心とし、三大を以て第八已下の住心とす。一には、一心を以て第十の住心の浅略とし、三大を以て九頭とするの浅門なり。一心には真生二門を撰するが故に真如門を密とする由とは成らざるなり」と釈する。

59 『釈論指事』（『興大全』上、七二頁）。

60 『釈論指事』（『興大全』上、九四頁）。

61 『釈論指事』（『興大全』上、九四頁）。

62 運敵は「此の古来の義、花遊院の義に符合せざるが故に之を用いず。私の一義を用うるべきなり」と釈する。

63 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇六頁下）。

- 64 『二教論』（『弘大全』第一輯、四七四頁）。
- 65 『二教論』（『弘大全』第一輯、四八五頁）。
- 66 『二教論』（『弘大全』第一輯、四九〇頁）。
- 67 この二義について、運敵は前者を「此の一義を用いず」とし、後者を「此の義を用うべきなり。凡そ根嶺の立義を新義と号する所以は、聖憲僧都の發明する所多きに由るなり」と釈する。
- 68 運敵は「意の言わく、約密の密も法体の不二なるが故に三重を出す」へと言わんとぞと釈する。
- 69 運敵は「此の二義共に道理有り。並びに之を用うべし。中に就いて、後の義を勝とす」と釈する。
- 70 澄観『大華嚴經疏』（『大正』三五、五一二頁下）。
- 71 運敵は、「古本を検ぶるに、此の題の草子に二本有り。一本は「此の論義の大意」と云うより已下の数紙無し。一本には唯だ此より已下の数紙のみ有つて全く従上の十余紙無し。想うに此より已下は別人の記す所、従上の本は憲公の記す所なるか。刊行の日、二本を合わせて一条とするが故に此より已下は多くは繁重無用に似たり。学者、之を知るべし」と指摘する。
- 72 『二教論』（『弘大全』第一輯、四九〇頁）。
- 73 『金剛頂經開題』（『弘大全』第一輯、六九〇頁）。
- 74 『釈論』（『大正蔵』三三、六〇六頁上）。
- 75 「雁」について、この字をどのように訓ずるのか不明。
- 76 『金剛頂經開題』（『弘大全』第一輯、七〇二頁）。
- 77 運敵は「此の中の二義、初の義を用いず。後の義を正とす。一一の道理、前の如し」と釈する。
- 78 『大日經開題』『大毘盧遮那』（『弘大全』第一輯、六五八頁）。
- 79 運敵は「草子印本の点は後人の強いて加うる所なり。古本の点に云わく、真如門は不二の法門は機の所知に非ざるが故に古本多く是の如し」と指摘し、「意の云わく、真如門とは彼の不二の法門の位、機の所知に非ざるが故に、無相の名相を立て

て施設仮立する位なり。是れを真如門と名づくなり」と釈する。

80 『釈論』（『大正藏』三三、五七六頁上）。

81 『釈論』（『大正藏』三三、六〇六頁上）。

82 『釈論』（『大正藏』三三、六〇六頁中）。

83 『釈論』（『大正藏』三三、六〇六頁中）。

84 『大智度論』（『大正藏』二五、三三六頁中）について、空海が『二教論』（『弘大全』第一輯、四八七頁）にて引用する文。

85 本註について運敵は、「註に加持説の義の意なりとは、此の文に於いて自証説と加持門説と両義の不同有り。二重の二諦の中に初重の二諦は両義惟し同じ。次の二諦に就いて、自証説の義は説真諦中無仏無衆生とは顯の真諦なり、説真諦中有仏有衆生とは密の真諦なり、顯密の真諦を並べ立てて二諦とすると謂えり。加持説の義は説真諦中無仏無衆生とは顯の真諦なり、説真諦中有仏有衆生とは密の俗諦なり、顯真密俗の二諦なりと謂えり。所謂の自性法身、如義語を以て彼の絶離を説くを密の俗諦とし、是れを加持門と名づく。加持門説の義、斯の意なり。或が因みに問う、密の真諦、如何。答う、自証の極位を密の真諦と名づく。諸相を離れたる位なり」と釈する。

86 『起信論』（『大正藏』三三、五七六頁上）。

87 『楞伽阿跋多羅寶經』（『大正藏』一六、五〇〇頁中）。

88 花遊院の二義について運敵は、「或るが問う、此の二義異路弁べ難し。之を弁べんこと如何。答う、初の義は約密の言心を離れるを顯とし、離れざるを密とす。後の義は如義一一心は顯密に通ずと雖も得談真理得縁真理と云うの時は密に局る。此れ隱顯互論の義に由るなり。又問う、二義何れをか勝とせん。答う、後の義難有り。既に離不離義此論明説と云う。若し如義一一心、顯密に通ずと謂わば、明説の論文に得談真理得縁真理と云うは何ぞ約顯の言心を隠すと云わんや。隠すときは則ち明説に非ず。故に初の義を正と為すべし。又問う、初の義も亦た難有り。既に此論明説と云う。而して離不離の文、約顯約密を分かつ。豈に自由の料簡に非ずや。答う、約顯の言心は無言の言、無心の心なり。縁詮の言心に望むれば則ち無言

無心は離言離心に属するなり。又請う、詳らかんじて之を言え。答う、如義一一心顕密に通ずといわば、約顕の辺は能説可説無きを得談真理とし、能念可念無きを得縁真理とす。然れども約密の得談得縁より之を見れば則ち約顕の得談得縁は不談不縁に成りぬ。豈に離言離心に非ずや」と問答を示す。

89 『金剛頂経開題』（『弘大全』第一輯、七〇二頁）。運敝は「此れより已下、蓮華院の義を挙げて三門の実知実相を引く。並びに蓮華院の義を返質して約顕約密の義を立てるなり」と釈する。

90 『金剛頂経開題』（『弘大全』第一輯、七〇二頁）。

91 『金剛頂経開題』（『弘大全』第一輯、七〇二頁）。

92 『秘蔵宝鑰』（『弘大全』第一輯、四六二頁）。

93 運敝は「意の云わく、因の一一心は即ち真如の一一心、果の一一心は是れ不二の一一心なり。一一心に因果二種の一一心有り」と釈する。

〈キーワード〉聖憲、釈論百条第三重、約顕約密、釈摩訶衍論